546
11

始

502
1-4 経済学

東京帝國大學
圖書之印

高畠素之著

マルクスの餘剰價値說

社會・經濟思想叢書(1)

事業之日本社出版部發行

大正
14. 10. 12
内交

546-11

序

マルクス學說、殊にその經濟的方面の研究については、學界諸家の驥尾に附して私も從來幾分の貢獻をなして來たつもりであるが、私の研究は尙いまだ決して充分とはいひ得ない。この方面に於ける私自身の研究は、尙ほ(一)マルクス學說全般にわたつた通俗平明なる講話的叙述と、(二)高級專門的なるマルクス批判研究との兩面を以つて補充されなければならない。私は目下、これらの執筆刊行に從事してゐる。

茲に刊行する『マルクスの餘剩價値說』は、此等兩面のいづれにも屬せざるもので、マルクスの原本『資本論』の中から、餘剩價値の原理に直接關係ある部分を拔萃し、傍らカウツキー、ボルヒアルト等諸家の研究を參考にしたものである。通俗書としては既刊『資本論解說』に及ばざること遠いが、マルクスの學說を直

接マルクス自身の叙述に從つて一括的に捕捉せしめる點は、本書の唯一の特徴とすべきである。

本書は主題を『餘剰價値』に局限したため、資本全般、利潤その他に關する學說的展開は勢ひ削除せざるを得なくなつた。此等については、いづれ題を改めて公刊する機會があらうと思ふ。

大正十四年八月二十六日

高畠素之

目次

序文

第一章　商品、價格及び利潤……一

一、三つの收入源泉——二、價格の決定要素——三、勞銀の決定要素——四、費用說の自家撞着——五、平均利潤率の成立——六、一般的の平均利潤率——七、利潤は資本から生れるやうに見える

第二章　利潤及び商品交換……一三

一、利潤は何處から來るか——二、買手の餘剰に基くといふ說——三、價値以上に賣買するといふ說——四、販賣者のみの餘剰に基くとする說——五、餘剰價値は流通行程より生ぜず

第三章　使用價値及び交換價値……二五

目次

一、使用價値と交換價値の區別——二、交換價値の內容——三、商品に體化せる人間勞働——四、生產力の變化と價値の變化

第四章　勞働力の賣買……三六

一、問題の難點——二、勞働力を商品たらしむる條件——三、勞働力の賣買は歷史的產物——四、勞働力の價値——五、勞働力の日價値

第五章　餘剩價値の成立……四八

一、資本主義的勞働行程の二特徵——二、生產物の價値組成——三、餘剩價値是正の苦悶——四、問題の解決——五、價値形成行程と價値增殖行程

第六章　不變資本及び可變資本……六八

一、價値の保存と附け加へ——二、勞働の二重性を示す例解——三、附け加へられる價値と保存される價値の比例——四、生產機關と價値形成との關係——五、生產機關の輪廻——六、勞働力の價値形成力

第七章　餘剩價値の率……九五

一、資本組成の公式——二、現實的の價値變化と價値資本化の比率——四、必要勞働時間と必要勞働——五、餘剩勞働及び餘剩勞働時間

第八章　勞働日……一一〇

一、勞働日の兩部分——二、勞働日の限界——三、勞働日を無制限に延長せんとする資本の努力——四、勞働者の反對要求——五、勞働日に投射された勞資の抗爭

第九章　相對的餘剩價値の概念……一二二

一、必要勞働日部分の可變性——二、勞働生產力の增進——三、絕對的餘剩價値と相對的餘剩價値——四、資本主義的生產の矛盾——五、生產力の增進は勞働者の幸福を齎らさず

第十章　協業……一三六

一、勞働者の數の問題——二、數から生ずる質的差異——三、社會的平均勞働——四、勞働者の數が對象的條件の上に齎らす革命——五、協業の定義と利益——六、協業の條件——七、資本の生產指導

目次

第十一章　分業及びマニュファクチューア……一五九
一、マニュファクチューアの二重起原——二、マニュファクチューアの分業——三、部分勞働者及び其道具——四、分業の利益——五、マニュファクチューアの二つの基礎形態
第十二章　機械及び機械工業……一七八
一、機械の特徴——二、機械の構成要素——三、機械の協業と機械組織——四、機械發達の歴史的起點——五、機械工業と舊工業との衝突——六、機械に依る機械生産——七、機械の採用と相對的餘剰價値——八、勞働日の延長、過剰人口の生産

——目次終——

マルクスの餘剰價値說

高畠素之著

第一章　商品、價格及び利潤

一、三つの收入源泉

經濟學は人間の生活に必要なる財の經濟的支給を取扱ふものである。此財の支給は、近世の資本主義國に於いては專ら商品の賣買に依つて行はれる。商品を所有するには、收入たる貨幣を以つて之れを購買するのである。收入には色々の種類がある。然し大體に於いて、三部類に區別することが出來る。即ち利潤と、地代と、勞銀とがそれである。

利潤は資本家が資本に依つて得る所のもの、地代は地主が土地に依つて得る所のもの、勞銀は勞働者が勞働力に依つて得る所のものである。そこで資本家から見れば資本、地主から見れば土地、勞働者から見れば勞働力は、彼等夫々の收入

なる利潤、地代及び勞銀の三つの異なつた源泉として現はれる。隨つて此等の收入を代表する所の價値も亦、夫々資本、土地所有並びに勞働から生ずるものの如く見えて來る。

二、價格の決定要素

經濟財支給の高については以上三つの收入の高の外に、尙商品の價格が決定標準となることは明かである。而して商品價格の大小が何に從つて決定されるかといふ事は、古來經濟學が最も立ち入つて攻究に腐心した所の問題である。

一見、この問題は何等の困難をも呈さないやうに見える。如何なる產業生產物について觀察しても、價格の大小なるものは、生產物を造る製造業者自身の費用に加ふるに、彼れの產業部門に於ける通例の利潤を以つてすることに依つて成立するものであることが知られる。即ち價格の大小は、生產者の自家費用の大小と利潤の大小とに懸るものである。

製造業者は商品の生產上に支出した一切の費用を、自家費用として計算する。先づ、製造上に必要なる原料及び助成材（例へば、棉花、石炭などに）についての費用がそれである。次には機械、器具、建物などに要する費用、更らに地代として支拂ふべき費用（他人の土地を賃借する場合について云へば借地料）、最後に勞銀がそれである。要するに、製造業者の自家費用なるものは、次の三項から成るといひ得る。

（一）生產機關（即ち原料、助成材、機械、器具、建物）。

（二）支拂ふべき地代（工場が工場主自身の土地に設けられてある場合にも算入される）。

（三）勞銀

三、勞銀の決定要素

ところで、以上三項の各について考へるとき、茲に豫期せざる困難が生じて來る。勞銀を採つて見よう。勞銀の大小如何に準じて、自家費用も亦、或は大となり、或は小となる。隨つて完成商品の價格も亦、それに準じて大となつたり、小となつたりする。然らば勞銀の大小は何に從つて決定されるか。それは勞働力の需要供給に從つて決定されるものとして置かう。

勞働力の需要なるものは、經營上に勞働者を要する所の資本から出て來る。されば勞働力の需要が强大であるといふ事は、畢竟資本の增殖が强大であるといふ事と同一の意味に歸する。

然らば資本なるものは、何から成つてゐるか。それは貨幣及び商品から成つてゐる。尤も後に説く如く、貨幣も亦一つの商品に過ぎぬものであるから、資本は

單純に商品から成るとも云ひ得る。そこで此商品の價値が大なれば大なる程、資本も亦ます〳〵大となり、隨つて勞働力の需要も、更らに此需要が勞銀の大小、延いては又製造品の價格に及ぼす影響も、ます〳〵大となる。

然らば資本を構成する商品の價値（又は價格）は、何に從つて決定されるか。それは此商品自體の製造に要した自家費用の大小に從つて決定される。ところがこの自家費用の中には、既に勞銀が含まれてゐるのである。そこで究竟するところ、勞銀の大小は、勞銀の大小に依つて説明されるといふ事になる。或は又、商品の價格は、商品の價格に依つて説明されるといふ事にもなる。

勞銀は又、勞働者の生活必需品の價格に依つて決定されるとも假定される。然し生活必需品なるものは、それ自身が商品であつて、其價格決定には勞銀も共に關與するのであるから、此假定の錯誤は一目瞭然である。

四、費用說の自家撞着

製造業者の自家費用を構成する第二の要素は生產機關である。然るに生產機關たる棉花や機械や石炭なども亦、商品であつて、勞働者の生活資料なり資本家の資本なりを構成する所の商品について言ひ得る通りの事が、此等の商品についても同樣に言ひ得ることは多言を要しない。

要するに、價格の大小を自家費用に依つて說明しようとする企圖は、哀れにも失敗に終つた譯である。かかる企圖は結局、價格の大小をば價格の大小それ自身に依つて說明しようとすることに歸してしまふ。

五、平均利潤率の成立

製造業者は自家費用の上に通例の利潤を追加する。此點については、一切の困難が除去されてあるやうに見える。蓋し製造業者が自己の爲に計算せねばならぬ利潤の率は、豫め彼れの知る所であつて、それは彼れの產業部門に通例のものとなつてゐるからである。勿論、かく言へばとて、個々の製造業者が特殊の事情に依つて、個々の場合に通例の利潤以上又は以下を得る事がないと斷言する譯ではない。然し一般的の平均をとつて考へれば、同一の產業部門に於ける凡ゆる企業の利潤は等一なるものである。即ち同一の產業部門には、共通の平均利潤率なるものが成立してゐることになる。

否、それのみではなく、異つた產業部門間の利潤率も亦、競爭に依つて相互一致する傾向がある。蓋し或る一部門に於いて特別に高率の利潤が得られることになると、かく有利な位置に置かれてない他の諸部門の資本は、此有利な位置に在る一部門に流れ込んで來る。或は又、絕えず新たに生じて來る所の資本は、いづれも利得多き放下を求めて已まないものであるから、進んで斯種の特別有利なる

部門に振り向けられることになる。かくして此部門の生産は驟て著しく膨大じ、其增殖した生産物を捌かす爲には、勢ひ價格を引き下げ、隨つて又利潤を低減せしめなければならなくなつて來る。或る一部門の利潤率が特別に低くなつた場合には、反對の結果が生ずる。即ち資本は出來得る限り迅速に此部門を去つて、此部門の生産はそれだけ縮小されることになり、その結果、價格竝びに利潤は增進しなければならないことになる。

六、一般的の平均利潤率

かくの如く、凡ゆる生産部門の利潤率は、競爭の結果平均に歸する傾きを有するものであつて、一般的の平均利潤率を生ぜしめる。尤も此利潤率は凡ゆる生産部門を通じて正確に等一なるものではないが、先づ等一に近いものと言ひ得るのである。勿論これは、同一部門の内部に於ける利潤率の等一ほどに一目瞭然の事實ではない。なぜならば、各異つた部門に於ける一般的の經費や、機械の運轉磨滅などは、極めて不等であり得るからである。

例へば紡績業といふ一生産部門の内部に於いては、原料の買込みや機械の運轉などに伴ふ經費は略一定してゐるので、紡績上の凡ゆる企業を通じて平均利潤率の成立は明瞭に看取し得る所であるが、紡績業と時計製造業とを比較する段になるとさうは行かない。なぜならば、時計製造業に於ける原料の買込みや機械の設置運轉などに伴ふ經費は、紡績業に於けるものと恐らく同一ではあり得ないからである。

此不等を平均化せしむる必要上、或る産業部門の總利潤（換言すれば、製造業者が事實に於いて見積り自家費用の上に追加する所の、百分率を以つて計算された利潤）は、他の部門の夫れに比して、本質的にヨリ大となつたり小となつたりすることがあり得る。前の例について假りに時計製造業の方がヨリ多くの經費を要

するとする。即ち一〇〇なる純費用に對して、紡績業の經費は一〇であるが、時計製造業の經費は二〇であるとする。さうすると同じ五割の利潤率が紡績業に於いては五五、時計製造業に於いては六〇なる總利潤となつて現はれることになる。

かかる事情のため、問題の眞相が隱蔽されることは事實であるが、然し各異つた經費を控除した後に殘る純利潤について考へれば、それは凡ゆる部門を通じてほぼ均一に近いものとなる。即ち紡績業に於ける總費用の中から一〇を控除し、時計製造業に於ける總費用の中から二〇を控除して、五割を計算すれば、いづれの部門に於いても五〇なる純利潤が得られる譯である。

七、利潤は資本から生れるやうに見える

斯樣に一般的の平均利潤率なるものが成立してゐるのであるから、一つの企業に依つて事實上與へられる利潤の大小は其企業に於ける資本の大小に從つて決定されることになる。假りに一般的の平均利潤率が一割であるとすれば、一百萬圓なる資本は十萬圓なる資本に比して十倍の利潤を齎らさなければならない譯である。(勿論これは、双方の營業が適當に執行されると假定し、且つ個々の企業の上に生じ得る營業上の特殊の僥倖や不運を悉く考慮外に置いての話である)。

加ふるに、利潤を得るものは單に產業上の經營(換言すれば、商品の生產に從事する經營)のみではなく、また生產者の手から消費者の手への商品移轉を媒介する商業上の營業や其他銀行業、運輸企業なども、同樣に利潤を齎らすのである。而して此等一切の企業を通じて、營業が順當に執行される限り、利潤は放下資本の大小に從つて決定される。そこで利潤なるものは、謂はば適當に培養された樹木から果實が與へられる如く自然に資本から生ずるといふ所信が、實地これらの營業に從事してゐる人々の意識に確立されるやうになるのは無利もない事である。

然し利潤なるものは又、かく資本の自然性質と見做されない限り、資本家の勞働の果實と見做される。實際のところ以上の說明に於いても、營業が適當に執行されねばならないといふ事は繰返し假定した所である。それほど營業執行者の個人的堪能といふ事が重大なる要件となるのであるのであつて、もしこの條件が缺けることになると、個々の企業に於ける利潤は容易に一般的の平均利潤率以下となり、反對に堪能なる營業執行者は、一般的平均利潤率の水準を突破することに成功し得るのである。

第二章　利潤及び商品交換

一、利潤は何處から來るか

だが利潤なるものは、そも〳〵如何にして『自然に』資本から生じ得るか。商品を生產するに方り、資本家は一定額の貨幣例へば一百圓を要する。此一百圓の中には彼れの自家費用の全部、即ち原料や、助成材や、勞銀や、機械、器具、建物其他の物の磨滅分などが含まれて居るべき筈である。彼れは後に至り、出來上つた商品を一百十圓で賣る。此完成商品が現實に於いて一百十圓の價値を有するものと假定することは、これ取りも直さず、此價値增殖分が生產の進行中、無から生じたと假定することになる。蓋し彼れが一百圓を以つて支拂つた一切の價値は、此商品の生產以前すでに存在してゐたのであつて、それ以外には何も存在し

て居らなかつたからである。斯樣に無から有が生ずると見る事は、一切の常識に反對するものである。そこで商品の價値は、生產の進行中に增大するものではなく商品の完成後に於いても資本家はそれ以前に於けると同一の價値（上例で言へば一百圓）を保有するに過ぎないといふ風に古來信じられて來た。今日でも尙大抵はさう信じられてゐる。

二、買手の餘剩に基くといふ說

然らば、資本家が商品の販賣に依つて得る十圓といふ超過額は何處から來たものであるか。商品が販賣者の手から購買者の手に移轉されるといふだけの事で、その價値がヨリ大となり得るものでないことは明かである。此場合にも亦、無から有が生ずることになるからである。

かかる難陷から脫する爲に、通例、二つの道が選ばれる。一方の道を選ぶ人々は言ふ。「商品は購買者の手に入つたとき、販賣者の手に在つたときよりも現實に於てヨリ多くの價値を有してゐる。購買者はこれに依つて販買者の有しなかつた欲望を充たされることになるからである」。また他方の道を選ぶ人々は言ふ。「商品は實際のところ、購買者の支拂ふべき價値を有するものではなく、購買者が價値以上に支拂ふ超過分は、對價を與へずして購買者の手から取られるものである」。

以上の兩見地を考察しよう。フランスの著述家コンヂアックは商業及政府に關する論著の中に（一七七六年）次の如く述べてゐる。

『商品交換に於いて等しき價値と等しき價値とが交換されると見るは誤りである。寧ろ反對に、兩契約者の各は、つねにヨリ大なる價値を得べくヨリ小なる價値を提供する。……事實に於いて、つねに等一の價値が交換されるとすれば、いづれの契約者も利得する所はないであらう。然るに双方とも利得を受けてゐる。

或はいづれも利得を受くべきである。何故であるか。蓋し物の價値は、其物が我々の欲望に對して有する關係の中にのみ存するものであつて、一方の人にとつてヨリ多き物は他方の人にとつてヨリ少なき物、一方の人にとつてヨリ少なき物は他方の人にとつてヨリ多き物である。……我々は自己の消費に缺くべからざる物を販賣に付すと假定するものではない。……我々は自己にとつて必要なる物を得る爲に、自己にとつて不用なる物を手放さうとする。即ちヨリ多くの物を得る爲に、ヨリ少なき物を與へようとするのである』と。

まことに奇拔な計算である。これによると、二人の間に交換が行はれるとき、いづれの者も得る所より多くを與へねばならないといふ事になる。假りに、私が洋服屋から八十圓で脊廣服を一着買ふとすれば、此脊廣服は洋服屋の手に在るときは八十圓以下のものであるが、私の手に入ると八十圓になるといふのである。この場合、物の價値とは我々の欲望に對する其物の關係の中に求められるといふ遁辭を持ち出しても駄目だ。蓋し購買者から見れば、脊廣服は貨幣よりも有用であると云へ、販賣者から見れば貨幣は脊廣服よりも有用となるからである。右の遁辭は更らに、使用價値と交換價値との混同をも含むものであるが、此事については尙ほ後に說く。

三、價値以上に賣買するといふ說

それでなくて若し、商品なるものは一般に價値以上の價格を以つて販賣されると見れば、其場合には更らに奇怪な結論が生じて來る。今、何等かの說明し得ざる原因に依つて、商品を價値以上に、例へば一百圓の價値ある物を一百十圓に販賣する特權が、販賣者に與へられたと假定して見る。即ち販賣者は、一割の價格追加を以つて商品を販賣し得ることになり、十圓といふ餘剩價値を收納する譯であるが、然し彼れは販賣者たりし後に購買者となるのであつて、今や第三の商品

所有者が販賣者として彼れに相對し、此商品所有者も亦一割方高く販賣する特權を與へられる。かくて前の販賣者は、販賣者として十圓の利得を受けるが、購買者の位置に立つたとき十圓の損をすることになる。これは要するに、一切の商品販賣者が相互に一割方價値以上で販賣する事を意味し、すべての者が價値通りに販賣することと全く同一の結論に歸する。商品の貨幣名（換言すれば價格）はこれがため增大するであらうが商品間の價値比例の上には何等の變化も生じない。

反對に、商品を價値以下に購買する特權が、購買者に與へられたと假定して見る。この場合には、購買者が更らに販賣者となることを考へる迄もない。彼れは購買者たる以前に販賣者であつたのだ。彼れは購買者として一割の利得を受ける以前、すでに販賣者として一割の損をしてゐた譯であつて、曩の場合と異なる所はない。

四、販賣者のみの餘剩に基くとする說

或は言ふかも知れない。——後に得らるべき利益に依る損失の斯かる相殺は、續いて販賣者となるやうな購買者のみについて言ひ得る事である。而も世には、販賣すべき何物をも有たない人々があると。かくて餘剩價値なるものは名目的の價格追加、換言すれば商品を價値以上に賣る販賣者の特權に基くといふ幻想を徹底的に主張しようとする人々は、購買するのみで販賣することなき一階級、消費するのみで生產することなき一階級を假定することになる。だが、斯樣な階級が依つて絕えず購買する所の貨幣は、權利上並びに强力上の何等かの名義に基き、交換に依らず無償で、商品所有者の手から不斷に流れて來なければならぬ。斯樣な階級に商品を價値以上で販賣するといふ事は、之れとりも直さず無料で渡した貨幣の一部を欺瞞的に取り返すことに外ならない。小亞細亞の諸都市は、斯樣に

して古羅馬に年貢金を納めてゐた。而して羅馬は、此貨幣を以て小亞細亞の諸都市から商品を購買した。其れは價値以上に購買されたのである。即ち小亞細亞の人々は、征服者たる羅馬人から年貢金の一部を欺瞞的に取り返すことに依り、後者に一杯食はせたのであるが、それでも小亞細亞人の方が一杯食はされた人々であることに變りはない。彼等の商品は、依然彼等自身の貨幣を以つて代價を支拂はれてゐたからである。斯樣な事は、致富即ち餘剰價値形成上の何等の手段ともなるものではない。

かく言へばとて勿論、個々の商品所有者が購買又は販賣の際、相手側を出し抜いて富を積むことがないといふ譯ではない。甲なる商品所有者は、其仲間の乙又は丙が如何に熱心に之れを欲しても、彼れに對して報復することが出來ず、却つて彼れの爲に飜弄される所となるほど機敏であるかも知れない。彼れは四百圓の價値ある葡萄酒を乙に販賣し、それと引き換へに五百圓の價値ある穀物を乙から與へられる。即ち彼れは四百圓を五百圓に變化し、ヨリ小なる貨幣からヨリ大なる貨幣を造つた譯であつて、彼れの商品は資本に轉化されたのである。此問題を尙ほ立ち入つて考へて見よう。

交換以前には、甲の手には四百圓の價値ある葡萄酒、乙の手には五百圓の價値ある穀物があつた。即ち合計九百圓といふ價値があつたのである。交換後にも矢張り、九百圓といふ總價値が存在してゐる。即ち交換された價値は鐚一文も增大することなく、ただ甲乙間への其分配が變化したに過ぎないのである。若し甲が交換といふ紛らはしい形態に依ることなく、直接に一百圓を盜んだとしても、矢張り同一の變化が生ずることになるであらう。交換された價値の總高は、其配分上の如何なる變化に依つても增大し得るものでないことは明かであつて、之れは丁度、ユダヤ人が十八世紀に造られた一つの銅貨を賣り、其代價として金貨を得たとしても、それが爲一國内における貴金屬の全量は毫も增大しないと同じであ

る。一國における資本家階級の總體、は自分自身を出し拔いて利得し得るものでない。

五、餘剩價値は流通行程より生ぜず

かくの如く、如何に扭つても捻つても、歸する所は依然として同一である。等價と等價とが交換されるとき、何等の餘剩價値も生ぜず、非等價と非等價とが交換されるときにも、同樣に、何等の餘剩價値も造り出されないことになるであらう。

とにかく、商品の販賣を通して目に見えるやうになつて來る價値增殖は、販賣に依つて生じたものではあり得ない。それは商品價値と商品價格との不一致に依つて說明し得るものでない。價格が現實に於いて價値と一致しないとすれば、我々は先づ價格を價値に約元しなければならぬ。換言すれば、この不一致をば偶然の事象として暫く問題外に置く事が必要である。これ妨害的の附帶事情に依つて說明の混亂を招かない爲に必要な事である。尙また、かかる約元は單に科學上にのみ行はれるものではなく、市場價格の昂騰と低落とは、互ひに相殺し合ふものであつて、結局此價格の內部的定則たる平均價格に落ち着く事となる。平均價格なるものは、例へば商人なり產業經營者なりが、長期間に亘る企業を行ふ場合、つねに彼等の導星となるものであつて、長期間の全部について觀察するとき、商品は現實に於いて平均價格以下にも以上にも販賣されることは、彼等の知る所である。そこで利潤の發生、換言すれば價値增殖なる事實は、商品が其現實的價値を以つて販賣されるといふ假定のもとに說明されねばならぬことになる。然し斯く假定するとき、餘剩價値なるものは既に生產の進行中に生じたものでなければならぬことは明かである。商品は、それが完成されて尙ほ最初の販賣者の手に止まつてゐる時すでに、最終購買者たる消費者が最後に其代價として支拂ふだけの

價値を有して居るべき筈である。語を換へて云へば、商品の價値は製造業者の自家費用を超過すべきであつて、生產の進行中に新たなる價値が生じて居らなければならない譯である。

そこで商品の價値なるものは、そも〳〵如何にして生ずるかといふことが問題となつて來る。

第三章　使用價値及び交換價値

一、使用價値と交換價値の區別

商品は先づ外界の一對象である。即ち其諸性質に依つて、人類の何等かの種類の欲望を充たす一つの物である。鐵、紙などの如き如何なる有用物も、之れを二重の見地、即ち質と量との兩面から觀察することが出來る。かくの如き有用物は、いづれも多數性質の集合體であり、隨つて種々なる方面に有用なるを得る。物の有用性は、其物を使用價値たらしめる。然し此有用性は空中に浮んでゐるものではない。それは商品體の諸性質に依つて條件づけられてゐるので、商品體を離れては存在しない。されば鐵、小麥、ダイヤモンドなどの如き商品體それ自身が一つ使用價値即ち財なのである。

然るに交換價値なるものは先づ一種類の使用價値が他種類の使用價値と交換される量的比率として現はれる。一定量の一商品はつねに斯々量の他商品と交換される。この交換比率が即ち前者の交換價値であつて、それは時と處とに準じて絶えず變化する。そこで交換價値なるものは、偶然的な純相對的なものであるやうに見え、コンヂャックの言つた如く『我々の欲望に對する商品の關係に』外ならないものの如く見えて來る。隨つて商品に內在する所の交換價値なる概念は、一の形容矛盾であるやうに見える。此問題を尙立ち入つて考察しよう。

二、交換價値の內容

一定量の商品、例へば一斗の小麥は、斯々量の靴墨、斯々量の絹、又は斯々量の金(きん)など、約して言へば種々樣々の比率における他の諸商品と交換される。即ち小麥は、種々樣々の交換價値を有する譯である。然るに一定量の靴墨や、絹や、金などは、いづれも一斗の小麥の交換價値であるから、これらの物は又相互に大いさを等しうする所の交換價値でなければならないことになる。そこで斯ういふ結論が生じて來る。――第一に一商品の有効なる諸交換價値は一つの等一物を言ひ現はして居る事、第二に又總じて交換價値の背後には、それに依つて言ひ現はされる所の或る內容が伏在してゐるといふ事である。

更らに二つの商品、例へば小麥と鐵とを例に採らう。これらの物の交換比率は如何やうにもあれ、それはつねに、與へられたる分量の小麥を何等かの分量の鐵と等位に置く方程式を以て示すことが出來る。例へば、一斗の小麥は二貫目の鐵に等しいといふが如くである。この方程式は何を意味するか。それは同じ大さの共通物が、一斗の小麥及二貫目の鐵といふ二つの異つた物の內に存在する事を示すのである。そこで此兩者は、それ自體に於いて小麥でなく鐵でもない或る第三者に等しいことになる。隨つて此兩者の各は、それが交換價値である限り、斯樣

な第三者に約元し得るものでなくてはならない。

この共通物は商品の有形的性質ではあり得ない。商品の有形的性質は、總じてそれが商品を有用ならしめ、使用價値たらしむる限りに於いてのみ、考慮に入るものである。交換比率に於いては、商品の使用價値なるものは明かに問題外に置かれる。此比率の內部に於いては、一つの使用價値はそれが適當なる比率を以つて存在しさへすれば、他の如何なる使用價値とも同じに通用する。或は又、老バーボン（一六九六年）の言ふ如く『一種類の商品と他種類の商品とは、その交換價値の大さが等しければ共に同じものである。同じ大さの交換價値を有する物の間には、何等の差異も差別もない。……一百磅に價する鉛なり鐵なりは、一百磅に價する銀なり金なりと同じ大さの價値あるものである。』商品は之れを使用價値として見れば、互に質を異にするといふことが先に立つが、交換價値として見れば、ただ量を異にし得るに過ぎない。

三、商品に體化せる人間勞働

そこで商品體を其使用價値から離れて見るときは、殘る所はただ勞働生產物たる一性質のみである。然し勞働生產物でさへも、既に我々の手の中で變化してゐる。勞働生產物の使用價値から抽象することは、同時に又勞働生產物を使用價値たらしめる有形的な諸成分及び諸形態からも抽象することになる。かくて勞働生產物はもはや卓子でもなく、家でもなく、絲でもなく、其他何等の有用物でもない。勞働生產物の凡ゆる有形的性質は消え去つてゐる。それはもはや指物勞働、建築勞働、紡績勞働その他如何なる一定の生產的勞働の生產物でもなく、其儘の人間勞働、即ち抽象的なる人間勞働の生產物たるに過ぎなくなる。語を換へて云へば、指物師によつて支出されるにしろ、又は建築業者、紡績業者等の何れに依つて支出されるにしろ、とにかく其支出の形態に頓着する所なく考へた人間勞働

力の支出の產物たるに過ぎなくなるのである。此等の物は、結局ただ其生產のために人間勞働力が支出され、人間勞働が蓄積されるといふことを示すに止まる。此等の物は、かくの如き共通なる社會的實體の結晶として見るとき、即ち價値となるのである。

要するに使用價値なるものは、抽象的意義における人間勞働が其中に對象化されてゐる故にのみ價値を有するのである。然らばこの價値の大さは、如何にして秤量されるか。使用價値の中に含まれてゐる所の『價値形成實體』たる勞働の分量に依つて秤量されるのである。而して勞働の分量は又、勞働の時間的繼續に依つて秤量され、勞働時間は更らに時、日等の如き一定の時間部分を尺度とする。

商品の價値が斯く其生產の進行中に支出された勞働の分量に依つて定まるとすれば、人が怠惰であり又は不熟練であればある程、商品を造り上げる爲にそれだけの多くの時間を要するのであるから、彼れの造る商品はそれだけ價値多い樣に見えるかも知れない。然しながら、價値の實體を形成する勞働とは、等一なる人間勞働、換言すれば同一なる人間勞働力の支出を謂ふのである。商品界の價値全體の中に表現される社會の總勞働力は無數の個別的勞働力から成り立つてゐるが茲では總て一樣なる人間勞働力と見做される。而して此等の個別的勞働力の各個は、それが社會的の平均勞働力たる性質を有し、又かくの如き社會的の平均勞働力として作用し、隨つて一商品の生產上、平均的に必要なる若しくは社會的に必要なる勞働時間のみを要する限り、いづれも皆同一なる人間勞働力である。而してその社會的に必要なる勞働時間とは、現在に於ける社會的に標準を成す生產條件と、勞働の熟練及能率の社會的平均程度とを以つて、何等かの使用價値を生產するに必要なる勞働時間を指すのである。

一例を擧ぐれば、イギリスに於いて蒸氣織機の採用された結果、一定量の絲を織物にするに、恐らく從來の勞働の半ばを以つて事足るやうになつたであらう。

イギリスの手織工は此同一の仕事に對して事實上從前通りの勞働時間を要したのであるが、彼れ自身の勞働一時間の生產物は、今や半時間の社會的勞働を表現するに過ぎなくなり、隨つて從前の價値の半ばに低落したのである。

かくの如く、一つの使用價値の價値を大小を決定するものは、社會的に必要なる勞働の分量、又は其生產上社會的に必要なる勞働時間に外ならないのであつて、個々の商品は此場合、總じて其所屬種類の平均見本と見るべきである。かくて同一量の勞働を含む所の、換言すれば同一量の勞働時間に生產され得る所の諸商品は、みな同じ大さの價値を有することとなる。一商品の價値が他の各商品の價値に對して有する比率は、前者の生產に必要なる勞働時間が後者の生產に必要なる勞働時間に對して有する比率に等しい。價値として見れば、如何なる商品も凝結したる勞働時間の一定量に過ぎないのである。

四、生產力の變化と價値の變化

されば商品の價値の大さは、其商品の生產に必要なる勞働時間が不變であるとすれば變化することはないであらう。然るにこの勞働時間は、勞働の生產力に變化ある毎に變化するものである。而して勞働の生產力は又種々なる事情、就中勞働者の熱練の平均程度、科學及び其工藝的應用の發達程度、生產行程の社會的結合、生產機關の範圍及び作用能力、諸種の自然事情等に依つて決定される。

例へば同一量の勞働が、豐年には不作の年に比し二倍量の小麥に依つて代表される。又同一量の勞働が、豐坑に於いては瘠坑に於けるよりも、多量の金屬を供給する等の事實もある。ダイヤモンドは、地表に於ては稀有のものであつて、之れを見出すには平均的に多大の勞働時間を要する。かくてダイヤモンドは、僅少の量を以つて多大の勞働を代表することになるのである。同一量の勞働も、豐坑

に於いてはヨリ多大のダイヤモンドに依つて代表されるのであつて、ダイヤモンドの價値は低落することになる。もし僅少の勞働を以つて炭素をダイヤモンドに轉化し得るやうになるとすれば、ダイヤモンドの價値は煉瓦の價値以下に低落し得るのである。概括して言へば、勞働の生産力が大なるに從つて、一物品の生産に要する勞働時間は益々小となり、其物品に含まれてゐる勞働量、從つて其物品の價値は益々小となるのである。反對に、勞働の生産力が小なれば小なる程、一物品の生産に要する勞働時間は益々大となり、かくして此物品の價値も亦益々大となるのである。

物は價値たらずして使用價値たることを得る。即ち人類に對するその物の効用が、勞働に依つて生じたのでない場合がそれであつて、例へば空氣や、處女地や、自然的の牧場や、野生の木材などに於いて見られる所である。又、物は商品たらずして有用であり、且つ人間勞働の生産物たることを得る。自己の勞働の生産物に依つて自己の欲望を充たす人は、使用價値を造り出すには相違ないが、商品を造り出すものではない。商品を生産する爲には、彼れは單に使用價値を生産するのみでなく、又他人の爲の使用價値、即ち社會的使用を生産しなければならぬ。又、單に他人の爲に使用價値を造るといふばかりでなく、それが使用價値として役立つ他人の手に交換を通して移轉されることを要するのである。最後に如何なる物も、使用對象たることなくしては價値たることを得ない。物が無用であるとすれば、其中に含まれてゐる勞働も亦無用であつて、かかる勞働は勞働とは認められず、隨つて何等の價値をも形成するものではないのである。

第四章　勞働力の賣買

一、問題の難點

商品の價値とは、商品の中に含まれる人間勞働に外ならないことは以上說く通りである。そこで之れより、どうして製造業者が商品の生產に投じたよりも大なる價値を生產の中から引き出すことになるかといふ曩の問題に論を戻さう。

曩の試問は斯うであつた。――資本家は一定商品の生產に、例へば一百圓といふ一定額の貨幣を要した。彼れは後に、完成した商品を一百十圓で販賣する。此十圓といふ超過價値は流通（換言すれば商品の交換）の內部に生じ得るものでないことは、曩の攻究に依つて明かにされた所である。それは生產の內部に生じたものでなければならぬ。そこで、之れが如何にして行はれたかを論證することが

問題となる。

價値を生ぜしむるものが社會的に必要なる勞働である事を知るとき、右の問題が或程度まで解決を見るに至ることは事實である。既存の生產機關、例へば紡績機械や棉花及び助成材などから綿絲を造るためには、紡績所で勞働が給付される。此勞働は社會的に必要なるものである限り、價値を造り出す。即ちそれは利用して磨滅した機械其他の物の價値を綿絲に移轉することに依つて、既存の生產材料――此場合で言へば生棉花――に新たなる價値を附け加へる。所が茲に尙問題となることは、資本家は此新たに給付された勞働の代價をも、既に自家費用の一部として支拂つてゐるやうに見えるといふ一事である。蓋し彼れの自家費用中には、機械や、建物や、原料及び助成材などの價値以外に、尙勞銀なる一費目も加へられてゐるからである。而して此の勞銀は給付された紡績勞働の代價として支拂はれる。そこで生產後に存在する一切の價値は、生產以前にも存在してゐた

やうに見えて來る。

が、紡績勞働に依つて新たに造り出される價値は、資本家が勞銀として支拂ふ價値と必ず一致しなければならないといふ譯のものでないことは明かである。それは此勞銀の價値以上ともなり以下ともなり得る。以上となつた場合には、其處に餘剰價値の起原が見出される譯である。

けれども我々は曩に、如何なる賣買に於いても價値通りの代價が支拂はれると假定したではないか。價格が價値と一致しないことは屢々見られる所であるが、かかる現象は當面の問題について何等の説明をも與ふるものでないことは我々の既に確めた所ではないか。隨つて資本家が價値以下の代價を勞働者に支拂ふことがあるとしても、かやうな事は此場合例外的の現象と見做し得るのである。餘剰價値の成立は、資本家が勞銀を以つて購買するものの價値を充分に支拂ふといふ通例の場合についても説明し得なくてはならない。そこで、勞働者と資本家との間に行はれる此特殊の賣買を更らに立入つて考察することが必要になつて來る。

二、勞働力を商品たらしむる條件

資本家が賃銀を支拂つて自己に奉仕せしめる所のもの、換言すれば彼が勞働者から購買する所のものは、即ち勞働者の勞働能力——勞働力である。然し貨幣所有者が勞働力を購買し得る爲には、豫め種々なる條件が充たされて居ることを要する。勞働力なるものは、それ自身の所有者に依つて販賣に附せられる限りに於いてのみ、又かく販賣に附せられるが故にのみ、商品として市場に現はれ得る。然し勞働力が其所有者に依り商品として販賣される爲には、彼れはそれを自由に處分し得る人であることを要する。換言すれば、自己の勞働能力の、自分自身の自由なる所有者である事を要する。彼れと貨幣所有者とは市場に相會し、同等の商品所有者として相互の關係に入る。商品所有者としては、何づれも等格の人で

ある。ただ異なる所は、一方は購買者、他方は販賣者であるといふ一點のみであつて、法律的には何づれも同等の人である。此關係を持續せしめる爲には、勞働力の所有者が常に一定の時間だけ其勞働力を販賣するものであることを要する。若し彼れが其勞働力を一括して賣り切りにしてしまふとすれば、彼れは自分自身を販賣することになる。彼れは自由の人から奴隷に轉化され、商品所有者から商品その者に轉化されてしまふことになる。

勞働力を商品として市場に出現せしむる第二の本質的條件は、其所有者が自己の勞働の對象化されてゐる商品を販賣し得ずして、寧ろ彼れの生きた現身中にのみ存在してゐる所の勞働力その者を商品として販賣に附さなければならない位置に在るといふ事である。それには、彼れが商品の生産機關（例へば原料勞働器具など）を所有せず、また商品が完成されて販賣される迄の間生存を維持し得べき何等の生活資料をも所有せざることを必要とする。

三、勞働力の賣買は歴史的産物

要するに貨幣所有者は、自由なる勞働者を商品市場に見出されなければならない譯であるが、此自由といふ言葉には二重の意義が含まれてゐることは、以上說くところに依つて明かである。即ち勞働者は先づ自由なる人として、自己の勞働力を商品として處分し得るものでなくてはならぬ。それと同時に又、彼れに販賣すべき他の何等の商品をも所有せず、勞働力の實現に必要なる一切の物から自由にされて居らねばならない。

此自由なる勞働者が何故、商品市場で貨幣所有者と相對立するやうになるかといふ問題は、貨幣所有者にとつては關係する所がない。それは我々にとつても、今のところ關係がないのである。ただ茲に明白なる一事がある。即ち一方の側に貨幣所有者又は商品所有者を造り出し、他方の側には勞働力以外に何物をも所有

せざる勞働者を造り出したものは自然ではないといふ事である。此關係は自然史的のものではなく、また凡ゆる歷史時代に共通するといふ意味での社會的のものでもない。それは過去における歷史的發達の所產であり、幾多の經濟的革命が行はれて、社會的生產の舊形態の全列が消滅した結果である。

四、勞働力の價値

これより、此特殊の商品たる勞働力を更らに立入つて考察しなければならぬ。勞働力なるものは、他の總ての商品と同樣に價値を有してゐる。此價値は如何にして決定されるか。

勞働力の價値は、他の總ての商品の價値と同樣に、その生產隨つて又再生產に必要なる勞働時間に依て決定される。勞働力なるものは、生きた個人の能力として存在するに過ぎぬものであるから、勞働力の存在は此個人の存在を前提とする。此個人の存在が與へられてゐるとすれば、勞働力は彼れ自身の生存に依つて造り出される。而して彼れは其生存を維持する上に、一定量の生活資料を要する。そこで勞働力の生產に必要なる勞働時間とは、歸するところ此生活資料の生產に必要なる勞働時間に外ならない。換言すれば、勞働力の價値とは勞働力の所有者の生存維持に必要なる生活資料の價値であるといふことになる。

此生活資料の總量は、勞働する所の個人を順當なる生活狀態のもとに維持するに充分のものでなくてはならぬ。衣、食、住、暖熱等に關する自然的欲望は、一國の風土的その他の自然的特徵の如何に依つて、種々異なるものである。他方に、必要なる欲望と稱せられるものの範圍並びに充足樣式は、それ自身一つの歷史的產物であつて、大部分は一國の文化段階に懸るものであり、就中また自由なる勞働者の階級が如何なる條件のものに、隨つて如何なる習慣と生活上の要求とを以つて形成されたかといふ事に懸るものである。かくて勞働力の價値決定には、他

の諸商品におけると異なり、歴史的並びに道德的の一要素が含まれることになる。然し一定の國、一定の時期について言へば、必要なる生活資料の平均範圍は一定してゐる。

勞働力の所有者は死を免れない。そこで、資本の持續的要求に應じて、勞働者の市場への出現を持續的たらしめんためには、消耗又は死亡に依つて市場から引き上げられた勞働力が少なくともそれと同數の新たなる勞働力に依つて絶えず補充されることを要する。隨つて勞働力の生産に必要なる生活資料の總量中には、此補充勞働力（換言すれば勞働者の子女）の生活資料も含まれることになる。更らに、一定の勞働部門に於て必要とされる熟練及び敏捷を修得すべき教育上の費用も、此生活資料の中に含まれる。尤も此費用は、通例の勞働力について言へば極めて微少なるものである。

五、勞働力の日價値

勞働力の價値は、一定量の生活資料の價値から成る。隨つてそれは、此生活資料の如何につれて、換言すれば、生活資料の生産に必要なる勞働時間の大小の如何につれて變化する。生活資料の一部なる例へば營養資料や燃料などは、日々消費されるものであつて、日々更新されることを要する。また他の生活資料なる衣類や家具などは、ヨリ長期間にわたつて消費されるものであるから、長期間の經過毎に更新すればいい譯である。商品によつては、日々購買されねばならぬものもあり、毎週購買されねばならぬものもあり、又一季毎に購買されねばならぬものもある。が、例へば一年間にわたつて、此等の支出の總額が如何やうに配分されるにしろ、それは結局日々の平均收入に依つて支辨されねばならない。されば勞働者が一年間に消費する一切の生活必需品の價値を總計して、其の結果を三百

六十五で割れば、茲に勞働力の現實的な日價値が得られる。

今、平均的の一日に要する此商品量の中に、六時間といふ社會的勞働が含まれてゐるとすれば、一日分の勞働力の中には半日分の社會的平均勞働が對象化されてゐることになる。換言すれば、一日分の勞働力を生産するには、半日分の勞働を要する譯である。一日分の勞働力を生産するに必要な此勞働量こそ、勞働力の日價値、換言すれば日々再生産される勞働力の價値を代表するものである。假りに半日分の社會的平均勞働が、一圓の價値ある金(きん)に依つて代表されるとすれば、此一圓は即ち勞働力の日價値に相應した價格である。そこで勞働者が一日一圓で其の勞働力を販賣に附すとすれば、此勞働力の販賣價格は價値と一致することになる。而して我々の假定する所に依れば、貨幣所有者は勞働者に此價値を支拂つてゐるのである。

勞働力なる商品の特殊の性質に伴ひ、購買者と販賣者との間に契約が締結されたときには、勞働力の使用價値は尙いまだ現實的には購買者の手に移轉されて居らないといふ結果が生じて來る。契約の締結後勞働力が實現されるときに至り、初めて其使用價値が成立して來るのである。即ち勞働力の讓渡と現實における勞働力の實現とは、おの〳〵異つた時に行はれるのである。然るに販賣に依る使用價値の形式的讓渡と、其現實的の引渡とが時間的に一致しないやうな商品に在つては、支拂は大抵の場合販賣後に行はれる。資本制生産方法の行はれる如何なる國に於ても、勞働力は機能を盡してしまつてから後に、例へば毎週の終りに代價を支拂はれるのであつて、勞働者は何處に於いても、資本家に勞働力の使用價値を前貸してゐることになる。彼れは代金の支拂を受ける以前、購買者に勞働力を消費せしめてゐる。即ち何處に於いても、勞働者は資本家に掛け賣りしてゐるのである。

第五章　餘剰價値の成立

一、資本主義的勞働行程の二特徴

勞働力の使用とは、勞働それ自身のことである。勞働力の購買者は其販賣者に勞働させて之れを消費する。資本家は其特殊の營業に如何なる生産機關、如何なる勞働力が必要であるかを經驗上よく心得てゐる。そこで彼れは、適當な生産機關と勞働力とを撰擇して購買し、勞働者に勞働させて此生産機關を消費するのである。彼れが最初手に入れる勞働力は、資本家の發生以前すでに存在してゐたものであつて、勞働が斯く資本のものとに隷屬することに依つて生ずる生産方法それ自身の轉化は、後に及んで漸く生じ得るものであるから、其攻究も隨つて後段に讓ることとする。

所で資本家に依る勞働力の消費行程といふ形を採つた勞働行程には、二つの特徴が示されてゐる。

先づ勞働者は、資本家の管理のもとに勞働する。資本家は勞働が順當に進行して、生産機關を目的通り利用して行くやうに注意する。語を換へていへば、勞働行程上における勞働者の自由と獨立は消滅したことになるのである。

第二に又、生産物は資本家の所有に屬するものであつて、直接の生産者たる勞働者の所有に屬するものではない。資本家は一日分の勞働力の代價を價値通りに支拂ふものと假定するのであるから、一日分の勞働力の使用は資本家の所有に屬する譯である。同樣に、生産物の生産に必要なる他の要素——生産機關も亦、資本家の所有に屬してゐる。つまり資本家の手に購買された物と物との間に勞働行程が行はれる譯であるから、此勞働行程に依つて與へられる生産物も亦、資本家の所有に屬することとなるのである。

二、生産物の價値

此生産物は、綿絲又は靴其他の如き使用價値である。だが假りに靴の如きものが、或意味に於いて社會的進歩の基礎となるものであり、而して資本家は斷乎たる進歩主義の人であるとしても、彼れは靴それ自身を目的として靴を造るものではない。使用價値なるものは總じて、交換價値の負擔者なるが故にのみ、又その限りに於いてのみ、生産されるのである。そこで資本家にとつては、二つの事柄が問題となつて來る。

第一に、彼れは交換價値を有する使用價値を生産しようとしてゐる。換言すれば、販賣用の物品たる商品を生産しようとしてゐるのである。第二に又、彼れは生産に要した諸商品（即ち彼れが商品市場で大切な貨幣を前貸することに依つて得た生産機關及び勞働力）の價値總額よりも高い價値を有する商品を生産しようとしてゐる。彼れは單に使用價値を生産しようとしてゐるのみでなく、又價値をも、單に價値のみでなく、更らに餘剰價値をも生産しようとしてゐるのである。

如何なる商品の價値も、其商品に含まれてゐる勞働の量に依つて決定されることは、曩に述べた通りである。これは勞働行程の結果として資本家の手に與へられる生産物についても同樣である。そこで先づ、此生産物に對象化してゐる勞働を考量することが必要になつて來る。

この生産物が、例へば綿絲であると假定しよう。綿絲を造るには、先づ原料たる例へば十斤の棉花が必要である。此棉花の價値については、今のところ問ふ必要はない。とにかく、資本家はそれを市場で價値通りに、例へば十圓で買つたとする。

棉花の生産に要した勞働は、すでに棉花の價格の中に一般社會的なる勞働として表現されてゐる。我々は更らに棉花の加工に於いて消費された勞働要具たる紡

錘其他の物が、二圓の價値を有するものと假定しよう。若し十二圓なる金の分量が二十四時間即ち二日分の勞働の生産物であるとすれば、綿絲の中には二日分の勞働が對象化されてゐるといふ結論が先づ生じて來る。

棉花の生産に要した勞働時間は、棉花を原料とする綿絲に要した勞働時間の一部であつて、此綿絲の中に含まれてゐる。紡錘の磨滅（消費）なくしては、棉花を紡ぐことが出來ないのであるが、此紡錘の生産に要した勞働時間についても矢張り、右と同樣のことが言ひ得るのである。

だが我々は、與へられたる社會的生産條件のもとに必要なる勞働時間のみが、支出されると假定するのである。隨つて一斤の綿絲を紡ぐのに、ただ一斤だけの棉花が必要であるとすれば、一斤の綿絲を造るのに一斤以上の棉花が消費されてはならないことになる。紡錘についても同樣である。資本家が物好きに鐵の紡錘の代りに金の紡錘を使用するとしても、綿絲價格に於いては、ただ社會的に必要なる勞働、換言すれば鐵の紡錘の生産に必要なる勞働時間のみが計算に入るのである。

次に考察すべきことは、紡績工自身の勞働が、棉花に加へる價値部分は如何といふ問題である。我々は、紡績勞働が單純なる勞働、即ち社會的の平均勞働であると假定する。之れと反對の事を假定したところで、問題の上に何等の變化も生ずるものでないことは、後に見る通りである。

紡績行程の進行中、社會的に必要なる勞働時間のみが消費されるといふことは、今や極めて重大な要件となるのであつて、若し平準的生産條件のもとに、一斤半の棉花が一勞働時間を以つて一斤半の綿絲に變化さるべきであるとすれば、12×1.5 斤の棉花を 12×1.5 斤の綿絲に轉化するところの勞働日のみが、十二時間の勞働日と見做される。蓋し社會的に必要なる勞働時間のみが、價値形成的の勞働時間として通用することになるからである。

いま、一日分の勞働力の價値が三圓であつて、此三圓が六時間の勞働を體化してゐるものとする。即ち勞働者が平均一日に要する生活資料を造るのに、六時間の勞働が必要であると假定するのである。ところで若し紡績工が、一勞働時間に一斤三分の二の綿花を一斤三分の二の綿絲に轉化するとすれば、六時間の經過中には十斤の棉花を十斤の綿絲に轉化することとなるであらう。即ち紡績行程の進行中に、棉花は六時間の勞働を吸收する譯である。之れと同一の勞働時間は、三圓といふ金量に依つて代表されてゐる。要するに棉花は、紡績それ自身に依つて三圓の價値を附け加へられることになるのである。

次に、生產物たる十斤の綿絲の總價値を考へて見よう。此綿絲には、二日半の勞働が對象化されてゐる。即ち二日分は棉花と紡錘量とに含まれて居り、半日は紡績行程中に吸收されたものである。これと同一の勞働時間は十五日といふ金量に依つて代表されてゐる。かくて、十斤の綿絲の價値に相當した價格は十五圓となり、一斤の綿絲の價格は一圓五十錢となるのである。

三、餘剰價値是正の苦悶

茲に於いて、資本家は喫驚する。生產物の價値は、前貸資本の價値に等しく、前貸價値は增殖することなく何等の餘剰價値をも造り出さなかつた。十斤の綿絲の價値に一致した價格は十五圓であつて、生產物要素の購買にも十五圓支出されたのである（棉花十圓、消費勞働要具二圓、勞働力三圓）。

資本家は恐らく斯う言ふであらう。自分は自分の貨幣をヨリ多くの貨幣にする目的で前貸したのであると。けれども陰府への道は善良な意圖を以て開かれてゐるのであつて、彼れは生產しないでも同樣に貨幣の取得を企て得るのである。そこで彼れは嘯して言ふ。もう、二度と自分は不意打を食はない。將來は自分で商品を造ることをやめて、市場で販賣されてゐる商品を買ふことにする。然し彼れ

の仲間の資本家が總てそれと同じ事をするとすれば、彼れは何處の市場に商品を見出し得るであらうか。彼れは貨幣を食ふ事は出來ない。そこで彼れは穩かに說いて言ふ。私の犧牲を考へて貰ひたい。私は十五志を使ひ果たすことも出來たのであるが、さうしないで寧ろ十五志を生産的に消費して綿絲を造つたのであると。けれども其報酬として、彼れは今悔恨の代りに、綿絲を持つてゐるのである。それに又、無い袖は振れないのであつて、彼れの克己の功德が何であらうと、其報酬として特別に支拂ふべき何物も存在して居らない。なぜならば、生産行程から生ずる生産物の價値は、生産行程の中に投ぜられた諸商品の價値の總額に等しいだけであるからである。そこで彼れは德は德の報なりと考へて、みづから慰めねばならないことになる。ところが、さうしないで、彼れは寧ろ執拗に主張する。綿絲は私にとつて不用のものである。私はただ賣る目的でそれを造つたのであると。然らばそれを賣れ。或はもつと單純に將來はただ自分自身の必要のみを目的として、物を造れ。

茲に於いて、彼れは片意地に後脚で立ち上る。そして言ふ。勞働者は自分自身の手足を以つて、無から勞働生産物を創造し得るであらうか、商品を生産し得るであらうか。彼れが依つて以つて、又その中にのみ勞働を體現し得る所の材料は、私が彼れに供給したのではないか。所で社會の大部分は、斯樣な無一物者から成り立つてゐるのであるから、私は私の生産機關たる棉花及び紡錘に依つて、社會に一つの測り知るべからざる奉仕をなし、且つ私が生活資料まで供給した勞働者の爲にも測り知るべからざる奉仕をなしたではないか。而も私はこの奉仕を計算に入れてはいけないのであるかと。

然し彼れは、勞働者からも、棉花及び紡錘を綿絲に轉化するといふ反對奉仕を受けたではないか。尙また奉仕といふことは、この場合問題ではない。元來、奉仕とは、商品にしろ、勞働にしろ、一つの使用價値の有用な作用に外ならないも

のである。然るにこの場合問題となるものは、寧ろ交換價値である、

彼れは勞働者に三圓といふ價値を支拂つた。そして勞働者は、棉花に附け加へられた三圓といふ價値を以つて、正確なる等價を彼れの手に返還したのである。即ち價値に換ふるに價値を以つてしたのである。茲に於いて今迄あれほど資本家的に傲慢であつた我々の友達は、遽かに彼れ自身の勞働者と同じ謙遜な態度を採つて言ふ。私自身も勞働したではないか。即ち私は、紡績工に對する監視の勞働を、監督の勞働をしたではないか。そして私の斯樣な勞働も價値を造るではないかと。茲に於いて彼れに仕へてゐる監督人と支配人とは、肩をすくめて笑を耐らえようとする。然し軈て彼れは晴々した微笑を以つて曩の相格に復する。要するに彼れは、斯樣な譫言を以つて我々を嘲弄するのである。而も其爲に鑑一文も支出するものではない。彼れは此種の無駄な言拔けと空虛な吳魔化しとを、其目的の爲に特別に給料を拂つて抱へてゐる經濟學の敎授共に一任するのである。彼れ自身も一つの實際家であつて、營業の範圍外で自分が何を言はうと、それは必ずしも顧慮する所でないが、營業の內部でなすべきことは常によく心得てゐるのである。

四、問題の解決

更らに立ち入つて考へて見よう。一日分の勞働力の價値は三圓であつた。なぜならば、勞働力それ自身の中に半日分の勞働が對象化されてゐるからである。換言すれば、一日分の勞働力の生產上に必要なる生活資料を造るには、半日分の勞働を要するからである。然るに勞働力に含まれてゐる過去の勞働と、勞働力に依つて給付され得る生きた勞働とは、換言すれば勞働力の日々の保存費と日々の支出とは、二つの全く異つた大さであつて、前者は勞働力の交換價値を決定し、後者は勞働力の使用價値を形成するものである。勞働者を二十四時間生かして置く

爲に半日分の勞働が必要であるといふ事は、決して彼れに全一日間働かしむることを妨ぐるものではない。斯くの如く、勞働力の價値と勞働行程における其價値增殖とは、二つの異つた大さである。資本家は勞働力を購買するに當り、此價値差額を眼目に置いてゐるのである。

綿絲なり靴なりを造るといふ勞働力の有力なる性質は、避け難き一條件に過ぎない。なぜならば、價値を形成する爲には、勞働は有用な形で支出されねばならないからである。然しながら眞に決定的の要件となるものは、價値――而も自身が有してゐる以上の價値の源泉であるといふ、勞働力獨特の使用價値であつて、資本家が勞働力に期待する特殊の奉仕とは、此使用價値に外ならないのである。而して資本家は勞働力を購買するに當り、商品交換の永久的法則に從つて行動するのである。

實際のところ、勞働力の販賣者は、他の各商品の販賣者と同樣に、販賣品の交換價値を實現して使用價値を讓渡するのである。彼れは使用價値を與へずして、交換價値を受くることは出來ない。勞働力の使用價値なる勞働それ自身が、それを販賣した人の所有に屬するものでない事は、丁度販賣された油の使用價値が油屋の所有に屬するものでないのと同じである。貨幣所有者は一日分の勞働力の價値を支拂つた。隨つて勞働力を一日中使用すること、即ち一日分の勞働は、彼れの所有に屬することとなる。勞働力は一日中作用し、一日中勞働を給付し得るに拘らず、勞働力を一日間保存するには半日分の勞働を要するのみであるといふ事實、換言すれば勞働力の使用が一日間に造り出す價値は、一日分の勞働力それ自身の價値の二倍に當るといふ事實は、勞働力の購買者から見れば特殊の一僥倖であつて、而かも販賣に對する何等の不正をも意味するものではない。

資本家は此事態を見て獨り微笑むのであるが、彼れは豫めそれを看破してゐるのである。さればこそ、勞働者は作業場に於いて、六時間の勞働行程に要する生

產機關のみでなく、また十二時間の勞働行程に必要なる生產機關をも見出すことになるのである。十斤の棉花が六時間の勞働を吸收して十斤の綿絲に轉化されるとすれば、二十斤の棉花は即ち十二時間の勞働を吸收して二十斤の綿絲に轉化されることとなるであらう。いま、此延長された勞働行程の生產物を觀察してみよう。

二十斤の綿絲の中には、今や五日分の勞働が對象化されてゐる。即ち四日分は消費された棉花及び勞働要具の中に對象化されてゐたものであり、一日分は紡績行程の進行中綿花に依つて吸收されたものである。然るに五日分の勞働を金で言ひ現したものは、三十圓であつて、綿絲二十斤の價格に相當する。綿絲一斤の價格は從前通り一圓五十錢である。然し此行程に投ぜられた諸商品の價値總額は二十七圓であり、而して絲絲の價値は三十圓である。即ち生產物の價値は、其生產上に前貸された價値に比し九分の一の增大を來たした譯であつて二十七圓は三十圓となり、三圓の餘剩價値が附加されたことになる。手品は遂に成功したのである。貨幣は資本に轉化された。

五、價値形成行程と價値增殖行程

問題の條件は悉く解決された。而も商品交換の法則は何等の毀損をも被らないのである。等價を以て等價と交換されたのである。資本家は購買者たる資格に於いて、棉花や、紡錘や、勞働力など各商品の代價を價値通りに支拂ひ、續いて又他の總ての商品購買者がする通りの事をした。即ち彼れは此等の物の使用價値を消費したのである。勞働力の消費行程は同時に又、商品の生產行程であるが、此消費行程に依つて、三十圓の價値を有する二十斤の綿絲を生じた。資本家は今や市場に歸り、商品を販賣するのであるが、曩には彼れは此市場で商品を購買したのであつた。彼れは一斤の綿絲を一圓五十錢に賣る。即ち一文でも其價値以上又

は以下には賣らないのである。それにも拘らず、彼れは最初流通内に投じたよりも三圓だけ多くを引き出す。

いま、價値形成行程と價値增殖行程とを相互比較して見るに、價値增殖行程なるものは一定の限點以上に延長された價値形成行程以外の何ものでないことが解る。價値形成行程なるものは資本に依つて支拂はれた勞働力價値が、新たなる等價に依つて補償される點までしか續かない限り、單純なる價値形成行程たるに止まるもので、此點以上に持續される時、それは價値增殖行程となるのである。

だが勞働は、使用價値の生産に要する時間が社會的に必要なものである限りに於いてのみ通用するのである。勞働力は通例の條件のもとに作用するものでなくてはならない。自動紡績機が紡績業について社會的に專ら行はれてゐる勞働要具であるとき、勞働者は紡車を使用するものであつてはならない。彼れの手に渡されるものは、平準的品質の棉花たるを要し、絶えず裂斷する所の屑物であつてはならない。蓋し此いづれの場合にも、彼れは一斤の綿絲を造るのに社會的に必要な勞働時間以上を要することになり、而も斯かる超過時間は價値又は貨幣を形成するものではないからである。

勞働力のいま一つの條件となるものは、勞働力それ自身が平準的の性質を有して居らねばならないといふ事である。勞働力なるものは、其使用される産業部門に專ら行はれてゐる平均程度の熟練と敏捷と迅速とを有するものでなくてはならない。此勞働力は通例の平均的な努力程度、即ち社會的に善く行はれてゐる能率程度を以つて支出されることを要する。資本家はこれについて、勞働なくしては一分時と雖も浪費されない樣に氣を配つてゐる。彼れは一定の期間に亘つて勞働力を買つたのであつて、自分の物は自分の手に所有することを主張する。彼れは盗まれることを欲するものではない。

最後に彼れは、原料及び勞働要具が、目的に反して消費されることを許さな

い。なぜならば、浪費された原料又は勞働要具は、對象化された勞働の過剰的に支出された分量を代表するものであつて、計算に入ることなく、價値形成の産物の要素となるものではないからである。

資本家の手に占有される勞働が、單純なる社會的な平均勞働であるか、それとも複合的なる、比重の高い勞働であるかは、價値增殖行程の立場から見れば全くどうでもいい問題であることは、曩に述べた通りである。社會的平均勞働に比べてヨリ高級的な、ヨリ複合的な勞働と見做される所のものは、要するに單純なる勞働力に比しヨリ大なる費用を以つて敎育され、生産上にヨリ多くの勞働時間を要し、隨つて又ヨリ高き價値を有する勞働力の實現されたものである。此勞働力は其價値が高い場合には、高級なる勞働として實現され、隨つて同一の期間に比較的大なる價値として對象化されることになる。然し紡績勞働と寶石細工勞働との間に如何なる等級差異があらうとも、寶石工が彼れ自身の勞働力の價値を回收するだけな勞働部分は、彼れが餘剰價値を造り出す追加的の勞働部分から決して質的に區別されるものではないのである。

第六章　不變資本及び可變資本

一、價値の保存と附け加へ

勞働行程の種々なる因子が生産物價値の形成上に關與する樣式は、おの〳〵異つてゐる。

即ち勞働者は、彼れの勞働の一定の內容、目的及び技術的性質の如何を問はず、一定量の勞働を附け加へることに依つて勞働對象に新たなる價値を附け加へる。然るに消費された生産機關の價値は、生産物價値の組成分子として再現する。例へば棉花や紡錘の價値は、綿絲價値の中に再發見されるのである。斯くの如く生産機關の價値は、生産物への移轉に依つて保存される。此移轉は生産機關が生産物に轉化されつつある時、換言すれば勞働行程の內部に、行はれるものであつて、勞働の媒介を受けるのである。然らば勞働は如何にして之れを媒介するか？

勞働者は同時に二重の勞働をするものではない。即ち一方には、棉花に價値を附け加へる勞働をすると同時に、他方には棉花の舊來の價値を保存する勞働をなすものではない。寧ろ新たなる價値の單なる附け加へに依つて、舊來の價値を保存することになるのである。然るに勞働對象に新たなる價値を附け加へることと生産物に依つて舊來の價値を保存することとは、勞働者が同一の時間に生ぜしめる二つの全く異つた結果であつて、而も彼れは同一の時間に一度勞働するだけであるから、結果の上の斯かる二重性は、彼れの勞働それ自體の二重性に依つてのみ説明され得るものであることは明かである。勞働なるものは同一の期間に、一方の資格を以つて價値を創造し、他方の資格を以つて價値を保存又は移轉しなければならないのである。

各勞働者は如何にして勞働時間隨つて又價値を附け加へるか。彼れは常に、そ

の特殊の生産的勞働を爲すことに依つてのみ此目的を達成するのである。即ち紡績工は紡ぐことに依り、機織工は織ることに依り、又鍛冶工は鍛へることに依つてのみ勞働時間を附け加へる。けれども生産機關たる棉花及び紡錘や、綿絲及び織機や、鐵及び鐵砧などが、生産物たる新たなる使用價値の形成要素となるのは、彼等が總じて勞働隨つて又新價値を附け加へる際における目的の一定した樣式、換言すれば紡ぐこと、織ること、鍛へることなどに依つて行はれる所である。これらの物の舊來の形態は消滅する。けれどもそれは、新たなる使用價値形態を以つて再現せんが爲にのみ消滅するのである。然るに價値形成行程の考察に依つて知られた所を以つてすれば、新たなる使用價値を生産するため、一つの使用價値が一定の目的に從つて消費される場合、その消費される使用價値の生産に要した勞働時間は、新たなる使用價値の生産に必要なる勞働時間の一部を成すものであり、隨つてそれは、消費される生産機關から新たなる生産物に移轉されるところの勞働時間となるのである。即ち勞働者が消費生産機關の價値を保存し換言すれば價値成分としてそれを生産物に移轉するのは、一般的意義における勞働を附け加へる結果ではなく、寧ろ此追加勞働の特殊の有用的性質、その特殊生産的な形態に依る結果なのである。勞働は斯樣な一定の目的に合致した生産的活動、即ち紡績や、機織や、鍛冶などとして作用する時、單なる接觸のみによつて生産機關を死から喚び覺まし、それに生氣を吹き込んで勞働行程の因子となし、之れと結合して生産物を形成するものとなるのである。

勞働者の特殊の生産的勞働が紡績でないとすれば、彼れは棉花を綿絲に轉化することなく、隨つて棉花及び紡錘の價値を綿絲に移轉することはないであらう。然るに若し、此同一の勞働者が職を變へて指物師になつたとしても、彼れは矢張り一日の勞働に依つて材料に價値を附け加へるであらう。即ち彼れは、紡績勞働とか指物勞働とかといふ方面から見た勞働ではなく、一般的意義における抽象的

社會的の勞働といふ方面から見た勞働に依つて價値を附け加へるのであつて、彼れが一定量の價値を附け加へるのは、其勞働が特殊有用的な內容を有する結果ではなく、寧ろそれが一定の時間繼續する結果なのである。要するに紡績工の勞働なるものは、其抽象的な一般的な資格を以つて、即ち人間勞働力の支出として作用する時、棉花及び紡錘の價値に新價値を附け加へ、又紡績行程といふ具體的にして特殊的且つ有用的なる資格を以つて作用する時、此等の生產機關の價値を生產物に移轉し、斯くして此價値を生產物の中に保存するのである。同一の時期に勞働の二重の結果が生ずる所以は此所に在る。

二、勞働の二重性を示す例解

勞働の單なる量的附加に依つて、新たなる價値が附け加へられ、附加勞働の質に依つて、生產機關の舊來の價値が生產物の裡に保存されるのである。勞働の二重性質に基く同一勞働の斯かる二重作用は、種々なる現象について明かに看取し得る所である。

今、或る發明の行はれた結果、紡績工は曩に三十六時間を以つて紡いだのと同一量の棉花をば、六時間で紡ぎ得るやうになつたと假定する。一定の目的に對し有用にして生產的なる活動として見るとき、彼れの勞働は其力を六倍したことになり、彼れの勞働の生產物は從前の六倍となつて、綿絲六斤であつたものが三十六斤に增大する。けれども此場合、三十六斤の棉花は從前六斤の棉花が吸收しただけの勞働時間しか吸收しない。棉花に附け加へられる新勞働は、舊來の方法を以つてした場合の六分の一にしか當らない。即ち從前の價値の六分の一しか、棉花に附け加へられないことになるのである。他方に於いて、生產物たる三十六斤の綿絲の中には、從前に六倍する棉花價値が含まれてゐる。即ち六時間の紡績勞働に依つて保存され生產物に移轉される原料の價値は、從前の六倍に相當するこ

とになる。尤も同一の原料に附け加へられる新價値は、從前の六分の一に過ぎないのである、

此事實に依つて我々は、同一の不可分的行程中に價値を保存する勞働の資格が、價値を造り出す勞働の資格とは如何に本質的に異なるものであるかを知ることが出來る。紡績作業の進行中に同一量の棉花の上に與へられる必要勞働時間が大なれば大なる程、棉花に附け加へられる新價値はます〳〵大となるが、同一の勞働時間中に紡がれる棉花の斤數が大なれば大なる程、生産物に依つて保存される舊價値はます〳〵大となるのである。

反對に、紡績勞働の生産力が不變であつて、紡績工は一斤の棉花を綿絲に轉化する爲に從前と同一量の時間を要するが、然し棉花それ自身の交換價値を變動して、一斤の棉花の價格は從前の六倍に昂騰するか又は六分の一に低落するものと假定する。此騰落いづれの場合にも、紡績工は同一量の棉花に同一の勞働時間、隨つて同一の價値を附け加へることは從前と異ならない。而していづれの場合にも、從前と同一の時間には、同一量の綿絲を生産するのである。それにも拘らず、彼れが棉花から生産物たる綿絲に移轉する價値は、從前の六分の一ともなり六倍ともなる。これは勞働要具の價が高くなるか、又は安くなるかして、而も同一の勞働要具が勞働行程の上に絶えず同一の機能を盡す場合にも、同樣に行はれる所である。

三、附け加へられる價値と保存される價値の比例

紡績行程の技術上の條件に變化なく、其生産機關の上にも何等の價値變化が行はれないとすれば、紡績工が同一の勞働時間に消費する原料及機械は、其價値に於いても、量に於いても、從前と異なる所はないのである。この場合、彼れが生産物の裡に保存する價値は、生産物に附け加へる新價値に正比例するものであつ

て、二週間には一週間の場合に二倍する勞働、隨つて二倍する價値を附け加へ、同時に又、二倍する價値を含む二倍量の材料を消費し、二倍する價値を含む二倍量の機械を磨滅する。かくして二週間の生產物の裡には、一週間の生產物の場合に比べて二倍の價値が保存されることになる。生產條件に變化なしと假定して、勞働者の附け加へる價値が大なれば大なる程、彼れに依つて保存される價値は益々大となる。然しながら、彼れの保存する價値が斯く大となるのは、彼れの附け加へる價値が大となる結果ではなく、寧ろ彼れ自身の勞働からは獨立した變化なき條件のもとに價値を附け加へる結果なのである。

勿論、相對的の意味に解すれば、勞働者は新價値を附け加へるのと同一の比例を以つて、常に舊價値を保存するものと云ふことが出來る。棉花が一志から二志に騰貴するにしろ、六片に下落するにしろ、彼れが一時間の生產物の裡に保存する棉花價値は、それが如何に變化するとしても常に、二時間の生產物の裡に保存する棉花價値の二分の一に過ぎない。更らに彼れ自身の勞働の生產力が變化して、增進するなり、低減するなりするとすれば、彼れは例へば一時間の勞働を以つて、從前よりも多量又は少量の棉花を紡ぐことになり、從つて一勞働時間の生產物の裡に保存される棉花價値は、從前におけるよりも多量又は少量となるであらう。而も尙、二時間の勞働に依つて保存される價値は、一時間の勞働に依つて保存される價値の二倍に當るのである。

價値は一つの使用價値の裡にのみ、一の物の裡にのみ存在する。隨つて使用價値が無くなれば價値も亦無くなる。尤も生產機關は使用價値と同時に價値をも喪失するものではない、蓋し生產機關なるものは勞働行程に依つて其使用價値の本來の形態を失ふとは云へ、それは實際のところ、生產物に於いて他の使用價値の形態を得んが爲に外ならないからである。然し價値から見れば、それが何等かの使用價値の裡に存在することは重要であるが、如何なる使用價値の裡に存在する

かは何うでもいい問題であつて、之れは商品の轉形に依つて知られる所である。此事實に依つて、次の結論が生じて來る。即ち勞働行程に於いて生產機關の價値が生產物に移轉されるのは、生產機關が其獨立した使用價値と共に交換價値をも失ふ限りに於いてのみ行はれるといふ事である。生產機關なるものは、それが生產機關として失ふ所の價値だけを生產物に移轉するに止まる。而も此價値移轉に對する勞働行程の對象的諸因子の關與は、此等の因子の種類の如何に依つて種々異なるものである。

四、生產機關と價値形成との關係

機械を熱する石炭は、跡型もなく消え失せる。車軸の塗布などに使用する油も亦、同樣である。染料其他の助成材も亦、消滅するものであるが、然し此等の物は生產物の特質の裡に再現する。原料は生產物の實體を形成する。然し其形態は變化してしまふのである。即ち原料及び助成材は、それが使用價値として勞働行程に入つた時の獨立した形態を失ふことになるのである。

嚴密の意義における勞働要具にあつては、さうではない。器具や、機械や、工場建物や、容器などは、其本來の形態を維持し、明日もまた昨日と同じ形で勞働行程に入る限りに於いてのみ、勞働行程內に役立つのである。これらの物は、其存命中即ち勞働行程の繼續中には、生產物に對抗して自己の獨立せる形態を維持して居るものであるが、其死後に於いても矢張り同樣である。機械や、道具や、勞働建物などの死骸は、それらの物が形成を助けた諸生產物から分離し獨立して存在してゐることは、其存命中と同樣である。今、かかる勞働要具の役立つ全期間、即ちそれが作業場に入つた日から、ガラクタ部屋に投げ込まれる日までの全期間を考へて見るに、此期間中に其使用價價は勞働に依つて完全に消費され、隨つて其交換價値は完全に生產物に移轉したことが認められる。假りに、一つの紡

續機械が十年間で一生を了るとすれば、十年に亙つた勞働行程の進行中に、其價値の全部は此期間に造り出される所の生産物に移轉されることになる。一つの勞働要具の一生は、其勞働要具を以つて絶えず新たに反覆される若干數の勞働行程を包含するものである。而して勞働要具はまた人の如きものであつて、何人も毎日二十四時間づつ死んでゆくのであるが、彼れが既に幾日死んで來たかは、正確に認められ得るものではない。而も此事實は、生命保險會社が人の平均壽命に依り、極めて確實にして且つ極めて有利なる結論を引き出すことを妨ぐるものではないのである。勞働要具についても其通りである。我々は經驗に依つて、一つの勞働要具、例へば一定種類の機械が平均して幾許の期間持續するかを知ることが出來る。假りに、勞働行程上に於ける其使用價値が六日間しか持續しないとすれば、かかる場合、此勞働要具は毎日平均して其使用の六分の一を喪失し、隨つて日々其價値の六分の一を生産物に移轉することになる。如何なる勞働要具の磨滅も計算されるのであつて、勞働要具が例へば、日々幾許の使用價値を喪失し、それに應じて又日々幾許の價値を生産物に移轉するかを知ることが出來るのである。

斯くて生産機關なるものは、それが勞働行程内に於いて自己の使用價値の破壞に依り喪失するところよりも以上の價値を、決して生産物に移轉するものでないことが極めて明かになる。生産機關にして若し失ふべき何等の價値をも有せず、隨つて人間勞働の生産物でないとすれば、それは生産物に何等の價値をも移轉しないこととなるであらう。それは交換價値の形成に關與することなくして、使用價値の形成に役立つこととなるであらう。此事實は、人間の助力なく天然自然に存在する一切の生産機關、即ち土地や、風や、水や、鑛脈内の鐵や、原始森林の木材などについて見受けられる所である。

我々は是れについて、いま一つの面白い現象に逢著する。例へば茲に一千磅に

値する一機械があつて、それが一千日間に磨滅すると假定しよう。然る場合、此機械の價値の千分の一は日々機械自身から其毎日の生産物に移轉されてゆく。同時に又、此機械は其活力が遞減するとはいふものの、つねに全體を以つて勞働行程内に作用するのである。斯くて勞働行程の一因子たる生産機關は、勞働行程には全部的に關與するが、價値形成行程には部分的にのみ關與するものであることが認められる。勞働行程と價値增殖行程との差異は、此場合それらの行程の對象的因子の上にも反映するのであつて、同一の生産機關が勞働行程の要素としては一括的に、又價値形成の要素としてはただ斷片的にのみ、同一の生産行程に關與することとなるのである。

他方にはこれと反對に、一つの生産機關は勞働行程には斷片的に關與するが、價値增殖行程には全部的に關與するといふことも可能である。今、棉花を紡ぐ際綿絲とならず徒らに塵埃となつてしまふ分が、一百五十斤の中日々十五斤づつに上ると假定しよう。而も斯くの如き一五パーセントの無駄が通例の現象であつて、棉花の上に與へられる平均加工から分離すべからざるものであるとすれば、綿絲の何等の要素ともなることなき此十五斤の棉花の價値は、綿絲の實質たるべき一百斤の棉花の價値と全く同樣に、綿絲價値の形成に關與することなるのである。一百斤の綿絲を造るには、十五斤の棉花の使用價値が塵埃となることを要するのであつて、かくの如く十五斤の棉花を無駄にすることは、綿絲生産上の一條件となるのである。されば、此棉花の價値は綿絲に移轉されるのである。此事實は勞働行程上の凡ゆる廢物を通じて行はれる。これは少くとも、かかる廢物が新たなる生産機關として再現することなく、隨つて又新たなる獨立した使用價値を形成することなき範圍内に於いて言ひ得ることである。斯樣な廢物利用は例へば、マンチェスターにおける大規模の機械製造諸工場に見られる所であつて、此等の工場に於いては、巨大なる機械に依つて鉋屑のやうに剝ぎ取られた鐵屑の

山なす堆積が、大きな車に積まれて、夕刻工場から製鐵所に運び出され、翌日また大嵩の鐵となつて、製鐵所から工場に運び込まれるのである。

生産機關なるものは、勞働行程の進行中、その舊來の使用價値形態を以つて價値を失ふ限りに於いてのみ、新たなる形態の生産物に價値を移轉するのである。生産機關が勞働行程内に於いて蒙り得る價値喪失の最大限度は、それが勞働行程に入る當初の價値量に依り、換言すれば、それ自身の生産に要した勞働時間に依つて制限されることは明かである。されば生産機關なるものは決してそれが役立つ勞働行程から獨立して有する所よりも以上の價値を生産物に附け加へ得るものではない。勞働材料なり、機械なり、其他の生産機關なりは、如何に有用であるにしろ、それが一百五十磅、即ち五百日分の勞働に値するとき、それに依つて造られた總生産物に一百五十磅以上の價値を附け加へるものではないのである。此等の物の價値は、それが生産機關として入る勞働行程に依つて決定されるものではなく、寧ろそれが生産物として出で來たる勞働行程に依つて決定されるのである。勞働行程内に於いては、それは單に使用價値として、即ち諸種の有用特質を有する物としてのみ役立つのであつて、此行程に入る以前すでに價値を有してゐないとすれば、生産物に何等の價値をも移轉することはないであらう。

五、生産機關の輪廻

生産的勞働が生産機關を新たなる生産物の形成要素に轉化しつつあるとき、生産機關の價値は一つの輪廻を經驗する。即ちそれは、消費された肉體を去つて、新たに生じた肉體に入るのである。然し此輪廻は、謂はば現實における勞働の背後に生ずるものである。勞働者は舊來の價値を保存することなくして、新たなる勞働を附け加へ得るものではなく、隨つて新たなる價値を造り出し得るものではない。なぜならば、彼れの附け加へる勞働は常に、一定の有用な形態を採つたも

のでなければならないからである。而して彼れは、既成の生産物をば新たなる生産機關たらしめ、かくして前者の價値を後者に移轉することなくしては、有用なる形態の勞働を附け加へ得るものではない。即ち價値を附け加へつつ價値を保存するといふ事は、自然が自己實現中の勞働力、換言すれば生きた勞働に授けた一つの賜物であつて、勞働者にとつては何等の費用をも要せず、而も資本家の手には、既存資本價値の保存といふ多大の利益を齎らす所のものである。營業が好況である間は、資本家は利殖に沒頭すること甚だしく、爲に勞働の斯かる無料贈與に留意することはないのであるが、一度び勞働行程の强激なる中絶を齎らす所の恐慌に逢著すると、資本家は敏感に之れを覺認するやうになるのである。

生産機關に於いて現實的に消費される所のものは、その使用價値であつて、此消費に依り勞働は生産物を生ぜしむることなるのである。生産機關の價値は實際のところ、消費されるものではなく、隨つて又再生産され得るのではない。それは寧ろ保存されるのである。然し此保存は、勞働行程内に於いて生産機關の價値それ自身の上に一つの操作が行はれる結果ではなく、本來生産機關の價値の存在體であつた使用價値が、消滅はするが、然し他の使用價値となつてのみ消費するといふ事實に基く結果である。生産機關の價値は、斯くの如く生産物の價値の裡に再現することは事實であるが、嚴密に言ふと、それは再生産されるものではない。再生産されるものは新たなる使用價値であつて、舊來の交換價値は此新たなる使用價値の裡に再現するのである。

六、勞働力の價値形成力

勞働行程の主觀的因子たる實現中の勞働力にあつては、さうではない。勞働が目的に合致した特殊の形態に依つて、生産機關の價値を生産物に移轉し保存しつつある各瞬間に、追加的の新たなる價値が形成される。假りに勞働者が自己の勞

働力の價値を生産する點、例へば六時間の勞働に依つて三志の價値を附け加へた點で、生産行程が中絶するとすれば、かかる價値は即ち生産機關の價値に基く部分以上に出づる生産物價値の超過を代表するものであつて、生産行程の内部に生じた唯一の新價値であり、此行程その者に依つて生産された唯一の生産物價値部分たるものである。勿論それは、資本家が勞働力の購買に際して前貸し、而して勞働者自身によつて生活資料の購買に支出された貨幣の位置を代へたものに過ぎない。支出された三志について言へば、此三志といふ新價値は、單に再生産されたものとして現はれるのみであるが、然しそれは現實的に再生産されるのであつて、生産機關の價値の如く外觀的にのみ再生産されるものではない。一つの價値が他の價値に依つて代位されるやうになるのは、此場合新になる價値創造を通して行はれることである。

されど勞働行程なるものは、勞働力の價値に對する等價だけが再生産されて勞働對象に附け加へられる限點を越えて持續するものであることは、我々の既に知る所である。其限點までならば六時間で充分である所を、勞働行程は例へば十二時間に亘つて持續する。斯くして勞働力の實現は、單に勞働力それ自身の價値を再生産するのみではなく、それ以上に尙一つの超過價値を生産することになる。此餘剩の價値は即ち、消費された生産物形成要素たる生産機關及び勞働力の價値以上に出づる生産物價値の超過を代表する所のものである。

以上、勞働行程の種々なる因子が生産物價値の形成上に演ずる樣々な役目について説述したのであるが、我々は斯くすることに依つて、實際のところ、資本の種々なる成分が資本自身の價値增殖行程の上に盡す各機能の特徴を示したことになるのである。生産物形成要素の價値總額以上に出づる生産物價値總額の超過は最初に前貸した資本價値以上に出づる自己增殖を遂げた資本の超過を意味するものである。原資本價値は一方には生産機關となり、他方には勞働力となるのであ

るが、此等のものは、原資本價値が其貨幣形態を脱ぎ棄てて、勞働行程の諸因子に轉化しゆく際に取る所の異つた存在形態に過ぎないのである。

七、不變資本と可變資本の定義

要するに、生產機關たる原料、助成材及び勞働要具に轉化される資本部分は、生產行程內に於いて其價値の大さを變化する事なきものであつて、我々は之れを不變の資本部分、或は簡單に不變資本と名づける。

反對に、勞働力に轉化される資本部分は、生產行程內に於いて其價値を變化する。それは自己の等價を再生產する上に尙、一つの超過たる餘剩價値を生產する。此餘剩價値は又それ自身變化し得るものであつて、大きくもなれば、小さくもなり得るのである。此資本部分は絕えず、不變量から可變量に轉化してゆく。そこで我々は之れを可變の資本部分又は簡單に可變資本と名づける。かくして勞働行程の立場から見れば、客觀的及び主觀的の兩因子として、即ち生產機關及び勞働力として區別される資本成分は、之れを價値增殖行程の立場から見れば、不變資本及び可變資本として區別されることになるのである。

不變資本なる概念は、決して此資本を組成する各部分の價値革命を除外するものではない。假りに棉花一斤の價が今日は五十錢であるが、明日は棉花不作の結果一圓に昂騰するとする。然る場合には、引き續き加工される舊來の棉花は、元來五十錢なる價値で購買されたものであるが今や一圓なる價値部分を生產物に附け加へることになる。又、すでに紡績され恐らく棉絲となつて市場に流通してゐる綿花も、同樣に其原價値の二倍を生產物に附け加へる。而も斯かる價値變化は、紡績行程それ自身の內部に生ずる棉花の價値增殖からは獨立せるものであることは、我々の認むる所である。若し舊來の棉花が尙いまだ毫も勞働行程に入らなかつたとすれば、それは今や五十錢の代りに一圓で再販賣され得る事となるであら

う。加之、舊來の棉花が既に勞働行程を通過せること少なければ少なき程、此結果はます〳〵確實となるのである。されば斯くの如き價値革命の行はれる際には、最も少なく加工された原料、即ち綿織物よりは寧ろ綿絲、綿絲よりは寧ろ棉花そのものに着眼することが、投機上の原則となるのである。價値變化は此場合、棉花を生産する行程の内部に生ずるものであつて、棉花が生産機關、換言すれば不變資本として作用する行程の内部に生ずるにのではない。一商品の價値は、其中に含まれてゐる勞働の量に依つて決定されることは事實であるが、然し此勞働量それ自身は又社會的に決定されるものである。一商品の生産上社會的に必要なる勞働時間が變化するとすれば――一例を擧ぐれば、同一量の棉花に依つて代表される勞働量が、不作の年には豐作の年に於けるよりも大である如く――同一種類に屬する舊來の商品は爲に一つの反應作用を受ける。蓋し此舊來の商品は常に、同一種類に屬する個々の見本たるに過ぎず、其價値は、社會的に必要なる勞働に依り、換言すれば現在における社會的條件のもとに必要なる勞働に依つて、秤量されることを常とするからである。

既に生産行程の内部に役立つてゐる所の勞働要具なる機械その他の價値、隨つて此等の物が生産物に移轉する價値部分も亦、原料の價値と同樣に變化し得るものである。例へば、新たなる一發明の生じたる結果、同一種類の機械が從前よりも小量の勞働支出を以つて再生産されることになると、舊來の機械は多かれ少なかれ價値を喪失し、隨つてそれだけヨリ少量の價値を生産物に移轉することとなる。然し此場合の價値變化も亦、右の機械が生産機關として作用する生産行程の外部に生ずるものである。一度び此行程の内部に入つた機械は、それが此行程から獨立して有する所よりも以上の價値を決して移轉するものでないのである。

生産機關の價値變化なるものは、生産機關が既に生産行程内に入つた後に反應作用的に生じたものであるにしても、決して生産機關の不變資本たる性質を變化

せしむるものではないが、それと同樣に、不變資本と可變資本との比率の上に生ずる變化も亦、これらの資本の機能上の差異に影響するものではないのである。勞働行程の技術的條件は、例へば從前十人の勞働者が僅少の價値を有する十個の道具を以つて比較的小量の原料に加工してゐたものが、今や一人の勞働者が價高き一機械を以つて從前に百倍する原料に加工するやうになるといふ風に激變し得るものである。かかる場合には、不變資本（換言すれば、充用生產機關の價値量）は非常に增大し、資本の可變部分（即ち勞働力の爲に前貸された資本部分）は著しく低減することになるのであらう。けれども此變化は單に不變資本と可變資本との分量比例、換言すれば總資本が不變分と可變分とに分割される比例を變化せしむるのみであつて、不變資本と可變資本との差異の上には影響するものではないのである。

第七章　餘剰價値の率

一、資本組成の公式

前貸資本Cが生產行程に於いて造出する餘剰價値、換言すれば前貸資本價値Cの增殖價値は、先づ生產物形成要素の價値總額以上に出づる生產物價値の超過として表現される。

資本Cは二つの部分に分かたれる。即ち生產機關の購買に支出される貨幣額cと、勞働力の購買に支出される他の貨幣額vとがそれである。cは不變資本に轉化された價値部分を代表し、vは可變資本に轉化された價値部分を代表する。そこで本來は C＝c＋v であつて、前貸資本を假りに五百圓とすれば、500圓C＝410圓c＋90圓v となる。然るに生產行程の終末になると、(c＋v)＋m（mは餘剰價

値)、例へば(410圓c＋90圓v)＋90圓m なる價値を有する商品が生じて來る。原資本CはC'に、五百圓から五百九十圓に轉化された。兩者の間の差額は九十圓なるm即ち餘剰價値である。所で生産要素の價値は前貸資本の價値に等しいのであるから、生産物形成要素の價値以上に出づる生産物價値の超過が、前貸資本の增殖價値、換言すれば産出された餘剰價値に等しいといふことは、實際のところ同義異語に外ならない。

だが、此同義異語は、更らに立ち入つた攻究を要するものである。生産物價値と比較されるものは、其形成に消費された生産要素の價値である。然るに充用不變資本中における勞働要具から成る部分は、其價値の一部だけを生産物に移轉し、殘餘の部分は舊來の存在形態を續けてゆく。これは曩に述べた所である。而して此後ちの部分は、價値形成上何等の役目をも演じないものであるから、茲ではそれは存在しないものと見ていい。それを計算に入れたところで、何等の變化も生じないであらう。試みに四百十圓なるcが三百十二圓なる原料と、四十四圓なる助成材と、勞働行程中に磨滅する所の五十四圓なる機械部分とから成り、而して現實的に充用される機械の價値が一千五十四圓であると假定する。生産物價値の生産上に前貸されたものとして計算に入る機械部分は、機械が其機能に依つて喪失し、かくして生産物に移轉する所の五十四圓といふ價値だけである。若し蒸氣機關其他のものとして舊來の形態のまま存續する一千圓をも計算に入れるとすれば、それは前貸價値の側と生産物價値の側との兩面に於いて計算に入れらるべきものとなり、かくして夫々一千五百圓及び一千五百九十圓なる結果が生じて來るのであらう。而して其差額たる餘剰價値は、依然九十圓であらう。そこで我我が價値生産上に前貸した不變資本といふ場合には、反對の事が前後の聯絡に依つて明かでない限り、いつも生産上に消費された生産機關の價値だけを指すといふことになるのである。

以上の假定を以つて之れより C=c+v なる公式に論を戻さう。此公式は C′=(c+v)+m に轉化され、かくすることに依つて又Cは C′に轉化されるのである。不變資本の價値は生產物の中に再現するに過ぎないことは、我々の知る所である。されば生產行程の內部に於いて現實的に新たに造り出される價値生產物は、此行程に依つて得られる生產物價値とは異つたものになる。最初一見したところでは (c+v)+m 即ち (410圓c+90圓v)+90圓m が新たに造り出された價値生產物であるかのやうに觀えるが、實はさうではなく c+m 即ち (90圓v+90圓m)が新たに造り出された價値生產物である。即ち五百九十圓ではなく、百八十圓が新たに造り出されたことになるのである。若しcなる不變資本が零に等しいとすれば、即ち生產された生產機關たる原料や、助成材や、勞働要具などは毫も使用するに及ばず、ただ天然自然に存在する所の素材と勞働力とを使用しさへすればいい產業部門があるとすれば、生產物に移轉せらるべき何等の不變價値分も存在しないといふことになるであらう。生產物價値の此分子(前の例でいへば四百十圓)は消滅することになるが、然し九十圓なる餘剩價値を含む一百八十圓といふ價値生產物は、cが最大の價値高を代表する場合と毫も異なる所はないであらう。C=(0+v)=v となり、而して價値の增殖された資本なる C′は v+m に等しく、C′−C は依然 m に等しいのであらう。反對に若し m が零に等しく、可變資本の形で價値を前貸された勞働力が、單に其等價を生產するに過ぎないとすれば、C=c+v となり、生產物價値なる C は (c+v)+0 に等しく、隨つて C=C′となるであらう。要するに、前貸資本は價値增殖を遂げなかつたことになるのである。

二、現實的の價値變化と價値變化の比率

餘剩價値なるものは、勞働力に變へられた資本部分たる v の上に生ずる價値變

化の結果に過ぎないこと、隨つて v+m は v+Δv（即ち v プラス v の附加量）に等しくなることは、實際我々の既に知る所である。然るに現實的の價値變化と價値が變化する比率とは、前貸總資本が其可變分の增大せる結果增殖するといふ事情に依つて紛らはしくされる。總資本は五百圓であつた。それが五百九十圓になるのである。そこで此行程を純粹の形で分析するには、不變資本が再現するに止まる生產物價値部分から全く抽象して、不變資本たる c を 0 に等しいと見ることが必要になつて來る。これは要するに、可變量と不變量との雙方を以つて運算するとき、加減いづれかに依つてのみ不變量を可變量に關聯せしめるといふ數學上の原則の應用に過ぎないのである。

いま一つの困難は、可變資本の本來的形態に基くものである。上例に依れば C'=410圓（不變資本）+90圓（可變資本）+90圓（餘剩價値）であるが、二番目の九十圓は最初から與へられてゐる不變の大さである故、これを可變の大さとして取扱ふことは不合理であるやうに見える。だが茲に謂ふ 90圓 v（即ち九十圓の可變資本）なるものは、實際のところ此價値が通過する行程の象徵たるに過ぎない。勞働力の購買に前貸された資本部分は、一定量の對象化された勞働であつて、購買された勞働力の價値と同樣に不變の價値量である。ところが生產行程を通過中、前貸九十圓に代つて實現された勞働力が、換言すれば死勞働に代つて活勞働が、一つの休止量に代つて流動量が、一つの不變量に代つて可變量が現はれて來る。その結果、v は一つの附加量を以つて再生產されることになる。資本制生產の立場から見れば、此全行程は勞働力に轉化された本來不變的なる價値の自己運動である。行程も其結果も、此價値の作用に歸せしめられる。そこで九十圓なる可變資本、換言すれば自己增殖をなす所の價値といふ公式が、矛盾に充ちたものとして現はれるとすれば、それは畢竟、資本制生產に內在した矛盾を言ひ現はしてゐるに過ぎないのである。

三、餘剰價値は可變資本のみから生ず

不變資本が零に等しいと假定することは、一見奇異の感を伴ふが、日常生活に於いて絶えず實行されてゐる所である。例へば木綿工業の上に於けるイギリスの利得を計算しようとする場合には、先づアメリカ合衆國や、印度や、埃及などに支拂はれた綿花價格を控除する。語を換へていへば、生產物價値の上に再現するといふだけの資本價値は、零に等しいと見るのである。

餘剰價値の直接的源泉であり、且つ餘剰價値に依つて價値變化を表現される資本部分についてのみでなく、また前貸資本總體について言つても、餘剰價値の比率なるものが經濟上大なる意義を有してゐることは、言ふ迄もない。資本の一部を勞働力への轉化に依つて增殖させる爲には、他の資本部分を生產機關に轉化することが必要である。可變資本を作用せしめる爲には、不變資本が勞働行程の一定の技術的性質に適應した比率を以つて前貸されることを要する。だが、化學上の手續にレトルトや其他の容器が使用されるとはいへ、此事實は分析の際レトルトそれ自身から抽象することを妨ぐるものではない。價値の造出と變化とをそれ自身に純粹の形で考察する限り、不變資本の素材的形態たる生產機關は、流動的な價値形成的の力を合體せしむべき素材となるに過ぎない。此素材が如何なる性質のものであるかといふことは、それが綿花であるか鐵であるかといふことは、どうでもいい問題となる。また此素材の價値も關係する所はないのである。ただ、此素材が生產行程の進行中に支出さるべき勞働量を吸收し得るに充分な量で存在してゐるといふことだけが、必要な條件となるのであつて、其量さへ與へられてゐるとすれば、價値が昂騰しやうと低落しやうと、又は土地や海の如く無價値のものとなつてしまはうと、價値造出竝びに價値變化の行程は、それがため影響を受けるものではないのである。

そこで先づ、不變資本は零に等しいと見る。その結果、前貸資本は c+v から v に縮約され、生產物價値なる (c+v)+m は、價値生產物なる (v+m) に縮約される。一百八十圓なる價値生產物（これは生產行程の全持續中に現實される所の勞働を表現するものであるが）が與へられてゐるとすれば、九十圓なる餘剩價値を得るには九十圓なる可變資本の價値を控除しなければならない。m を代表する所の 90圓 なる數字は此場合、生產された餘剩價値の絕對量を言ひ現はすものである。然るに其相對量、換言すれば可變資本價値增殖上の比率なるものは、可變資本に對する餘剩價値の比率に依つて決定され m/v に依つて言ひ現はされることは明かである。上例で言へば、それは $\frac{90}{90}=100\%$ となるのである。可變資本の斯かる相對的價値增殖、換言すれば餘剩價値の此相對量を、我々は餘剩價値率と名づける。

四、必要勞働時間と必要勞働

勞働者は勞働行程の一部に於いて、彼れの勞働力の價値、換言すれは彼れ自身の生活必需品の價値だけを生產するに過ぎないことは、曩に述べた所である。彼れは社會的分業に立脚した狀態のもとに生產するのであるから、直接に自己の生活資料を生產するものではなく、例へば綿絲の如き特殊の一商品の形で自己の生活資料の價値に等しき、又は斯かる生活資料を購買するに必要なる貨幣に等しき價値を生產する。彼れが此目的に充用する勞働日部分は、彼れが日々平均的に要する生活資料の價値の大小に從ひ、換言すれば彼れの生活資料の生產上日々平均的に要する勞働時間の大小に從つて、ヨリ大ともなればヨリ小ともなる。

彼れの一日の生活資料の價値が平均して六時間なる對象化された勞働を代表するとすれば、彼れは此價値を生產する爲に、日々平均六時間づつ勞働しなければ

ならないことになる。彼れが資本家の爲ではなく、自分自身の爲に獨立して勞働するとしても、彼れ自身の勞働力の價値を生産し、かくすることに依つて自己の生存（即ち不斷の再生産）に必要なる生活資料を獲得する爲には、他の事情に變化なき限り、一日の中右の場合と平均して同一なる可除分だけ勞働しなければならぬことになるであらう。然るに彼れは、例へば三志といふ勞働力の日價値を生産する勞働日部分において、豫め資本家から支拂はれた價値の等價を生産するだけであり、換言すれば新たに造り出した價値に依つて、前貸された可變資本價値を償ふだけであるから、此價値生産は單なる再生産として現はれることになる。そこで我々は此再生産が行はれる勞働日部分を必要勞働時間と名づけ、其持續中に支出される勞働を必要勞働と名づける。此勞働は、勞働者の立場から見れば、彼れの勞働の社會的形態から獨立してゐるが故に必要であり、又資本及び其世界にとつては、勞働者を不斷に存在せしめることは彼等の基礎たるが故に必要となるのである。

五、餘剰勞働及び餘剰勞働時間

勞働行程の第二の期間たる、勞働者が必要勞働の限界を起えて勞役せしめられる勞働日部分は、彼れの勞働を、勞働力の支出を要することは事實であるが、然し彼れの爲に何等の價値をも形成するものではない。それは無からの創造の凡ゆる魅力を以つて、資本家の心を恍惚たらしめてゐる所の餘剰價値を形成するのである。我々は此勞働日部分を餘剰勞働時間と名づけ其持續中に支出される勞働を餘剰勞働と名づける。價値を勞働時間の單なる凝結、換言すれば單なる對象化された勞働と解することは、價値一般の認識上決定的に重要なことであるが、それと同樣に又、餘剰價値を餘剰勞働時間の單なる凝結、換言すれば單なる對象化された餘剰勞働と解することは、餘剰價値の認識上決定的に重要なことである。た

だ同じ餘剰勞働を直接的生産者たる勞働者から搾取するのにも、其形式は種々樣樣ある。而して此形式上の差異に依つてのみ、各種の經濟的社會形態間に區別が與へられるのであつて、例へば奴隷制社會と賃銀勞働制社會との區別の如きがそれである。

可變資本の價値は可變資本を以つて購買した勞働力の價値に等しく、而して此勞働力の價値は、勞働日の必要部分を決定するのであるが、反對に餘剰價値の方は、勞働日の過剰部分によつて決定されるものであるから、餘剰價値と可變資本との比例は、餘剰勞働と必要勞働との比例に等しいといふ結論が生じて來る。語を換へていへば $\frac{\text{餘剰價値率}}{v}=\frac{m}{\text{餘剰勞働}/\text{必要勞働}}$ といふことになるのである。此等の兩比例はいづれも、同一の關係を異つた形に言ひ現はしてゐる。即ち初めは對象化された勞働、次には生きた勞働の形に言ひ現はしてゐるのである。

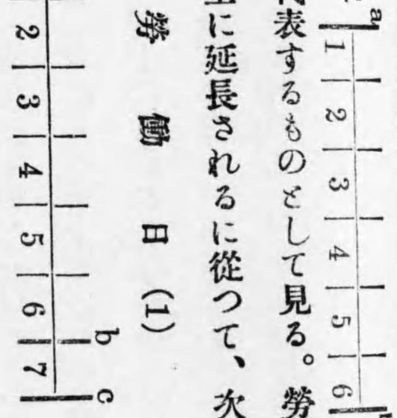
要するに、餘剰價値率なるものは、資本に依る勞働力搾程度、換言すれば資本家に依る勞働者搾取の程度を正確に言ひ現はしたものとなるのである。

第八章　勞働日

一、勞働日の兩部分

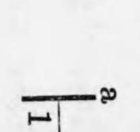
我々は、勞働力が其價値通りに賣買されるといふこと前提から出發した。勞働力の價値は、他の凡ゆる商品の價値と同じく、其生産に必要なる勞働時間に依つて決定される。で、若し勞働者の一日の平均生活資料の生産に六時間を要するとすれば、彼れは一日分の勞働力を生産する爲に、換言すれば一日分の勞働力の販賣に依つて得た價値を再生産する爲に毎日平均六時間づつ勞働しなければならないことになる。この場合彼の勞働日の必要部分は六時間であつて、他の事情に變化なき限り、その大さは一定してゐることになる。だが、之れだけではまだ勞働日それ自身の大さは與へられたことにならない。

假りに



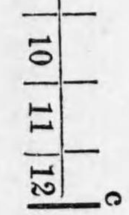
なる線が必要勞働時間の持續(長さ)たる六時間を代表するものとして見る。勞働がab以上に一時間、三時間、六時間、又はそれ以上に延長されるに從つて、次の如き三つの異つた線が得られる。——

勞働日(1)



勞働日(2)

勞働日(3)



これらの線は夫々七時間、九時間、及び十二時間なる三つの異つた勞働日を示し、而して延長線たるbcは餘剰勞働の長さを示す。勞働日はab+bc即ちacであるから、それは可變の大なるbcの變化につれて變化する譯である。abは一定して

あるのであるから、abに對するbcの比例は常に秤量し得るものであつて、勞働日(1)に於いてはabの六分の一、勞働日(2)に於いては六分の三、勞働日(3)に於いては六分の六となる。更らに $\frac{\text{餘剰勞働時間}}{\text{必要勞働時間}}$ なる比例は餘剰價値率を決定するものであるから、abに對するbcの比例は即ち餘剰價値率を示すことになる。即ち、此等の相異つた三勞働日に於ける餘剰價値率は、夫々一六バーセントと三分の二、五〇バーセント及一〇〇バーセントである。

反對に餘剰價値率のみを以つてしては勞働日の大小は與へられない。餘剰價値率が同じ一〇〇バーセントである場合にも、勞働日は八時間ともなれば、十時間ともなり、十二時間ともなり得る。同一の餘剰價値率は、勞働日の兩部分たる必要勞働と餘剰勞働とが相等しき大さであることを示すとはいへ、此等の部分の各が果して幾許の大さを有するかを示すものではない。

二、勞働日の限界

勞働日なるものは、不變の大さではなく、可變の大さである。その兩部分の一は勞働者自身の不斷の再生産に必要なる勞働時間に依つて決定されることは事實であるが、然し兩部分の總體の大さは餘剰勞働の長短（持續）に從つて變化する。要するに勞働日は決定し得るものであつて、而もそれ自身に於いては決定されて居らないのである。

さて、勞働日なるものは斯樣に固定の大さではなく、流動的の大さであるとはいへ、他方に又、一定の限界内に於いてのみ變化し得るものである。尤も其最低限界は決定し得るものではない。もちろん、延長線たる餘剰勞働が零に等しいとすれば、勞働者が自己の生存を維持するため必ず勞働しなければならぬ勞働日部分といふ最低限界が得られる。だが資本制生産方法の基礎上に於いては、必要勞

働なるものは常に勞働日の一部を成し得るのみであつて、勞働日は決して此最小限界まで短縮され得るものではないのである。

反對に、勞働日の最高限界は與へられてゐる。勞働日なるものは、一定の限界以上には延長され得ないのである。此最高限界は二樣に決定される。先づ勞働力の物理的限界に依つて。蓋し人類は、一晝夜二十四時間の間に、一定量の活力しか支出し得ないのであつて、毎日使用される馬は、八時間以上勞働し得ないのと同樣である。人類の活力は一日の若干部分の間、休息しなければならない。眠ることを要するのである。又、食べたり、洗つたり、着たり、其他諸種の肉體的欲望を充たすためにも、若干の時間を要する。だが、勞働日の延長は、斯樣な純物理的限界の外にも、尙ほ道德的の諸限界に逢著する。勞働者は諸種の精神的竝びに社會的欲望を充たすためにも時間を要する。

要するに、勞働日の變化なるものは、物理的竝びに社會的限界の內部に行はれるのである。だが、此等の兩限界は極めて伸縮自在なものであつて、如何やうにも融通が利く。斯くして八時間なり、十時間なり、十二時間なり、十四時間なり、十六時間なり、十八時間なり、種々樣々の大さを有する勞働日が見出されることになるのである。

三、勞働日を無制限に延長せんとする資本の努力

資本家は勞働力をその日價値通りに購買した。一勞働日中における勞働力の使用價値は、彼れの所有に屬してゐる。彼れは斯くして、一日中自己の爲に勞働者を勞働せしめる權利を獲得したのである。だが一勞働日とは何か。それは一晝夜二十四時間より小なることは言ふ迄もない。どれだけ小であるか。勞働日の此極限たる必然的制限については、資本家は彼れ自身の見解を有してゐる。彼れは、資本家としては人格化したる資本に過ぎない。彼れの魂は資本魂である。然

るに資本なるものは、ただ一つの生命衝動を有するのみである。それは即ち、價値を增殖しようとする衝動、餘剰價値を造り出さうとする衝動、換言すれば自己の不變的部分たる生產機關を以つて、可能なる最大量の餘剰勞働を吸收しようとする衝動である。資本とは、宛ら吸血鬼の如く生きた勞働を吸收することに依つてのみ生命を與へられる所の、而して之れを吸收すること多ければ多き程ますます著しく生命を與へられる所の、死んだ勞働である。勞働者が勞働する時間は、即ち資本家が其購買勞働力を消費する時間である。勞働者にして若し、其の利用し得べき時間を自分自身の爲に消費するとすれば、彼れは資本家のものを盜むことになるのである。

四、勞働者の反對要求

それで資本家は、商品交換の法則に立場を求める。彼れは他の凡ゆる購買者のする如く、購買商品の使用價値から可能なる最大の利用を打出しようとする。然るに其時突如として、生產行程の激騷裡に鳴りを鎭めてゐた勞働者の聲が揚がる。——

俺がお前に賣つた商品は、其使用に依つて價値が、而かもそれ自身の價する所よりも大きな價値が造り出されるといふ點で、他の商品群から區別されてゐる。さればこそ、お前はそれを買つたのだ。お前の目に資本の價値增殖として映ずるものは、俺から見れば勞働力の過剰支出である。お前と俺が市場に知る所の法則は、商品交換の法則以外にはないのだ。そして商品の消費は、商品を讓渡する販賣者の所有に屬するものでなく、讓渡される購買者の所有に屬するものであるから、日々與へられる俺の勞働力の使用はお前のものである。けれども俺は、其日々の販賣價格を得なければ、日々それを再生產して、新たに販賣することは出來ないのだ。年齡や其他の原由に因る自然的消耗は暫く措き、俺は明日も今日と同

一標準狀態のもとに於ける能力と、健廉と、鮮かさとを以つて、勞働し得なくてはならない。お前は絕えず『節約』と『節制』の福音を說法して吳れる。よろしい！それなら俺は冷靜な、つましい一家の主人として、俺の唯一の財產である勞働力を節用し、その一切の馬鹿馬鹿しい浪費を愼まう。俺の勞働力の中から、その順當な存續と健全な發達とに一致するだけを日々實現し、運轉し、勞働に轉化せしめよう。お前は勞働日を限りなく延長することに依つて、俺が三日がかりで回收し得るよりも多量な勞働力を一日で實現せしめ得るのだ。お前が斯樣にして勞働の上に得る所のものを俺は勞働實體の上に失ふことになる。俺の勞働力の利用と掠奪とは、全く異つた事柄である。一人の平均勞働者が適度な勞働支出を以つて生存し得る平均期間が三十年であるとすれば、お前が日々代價を支拂ふ俺の勞働力の價値は、三十年間における總價値の$\frac{1}{365\times30}$即ち$\frac{1}{10950}$となる譯だ。

然るに之れを十年間で消費するとしても、お前は一日に其總價値の$\frac{1}{3650}$を支拂ふことなく、矢張り$\frac{1}{10950}$しか支拂はないであらう。此場合には、俺の勞働力の日價値は三分の一しか支拂はれないことになり、日々俺の商品の價値の三分の二といふものが盜掠されることになるのである。つまり三日分の勞働力を消費して、一日分の代價しか支拂はないことになるのであつて、之れはお互ひの契約及び商品交換の法則に違犯する譯である。そこで俺は、標準時間の勞働日を要求するのであるが、それもお前の心情に訴へて要求する譯ではない。なぜといつて、金錢問題については人の心は鬼になるからだ。お前は模範的の市民であるかも知れない。恐らく動物虐待防止會の一員であり、おまけに聖者と評判されてゐる人であるかも知れない。けれどもお前が俺に對立して代表してゐる所の物には、心臟の鼓動といふものがないのだ。其處に鼓動してゐる如く見えるものは、俺自身の心臟の鼓動である。俺は標準勞働日を要求する。俺は他の凡ゆる販賣者のやうに、俺の商品の價値を要求するからだ。

五、勞働日に投射された勞資の抗爭

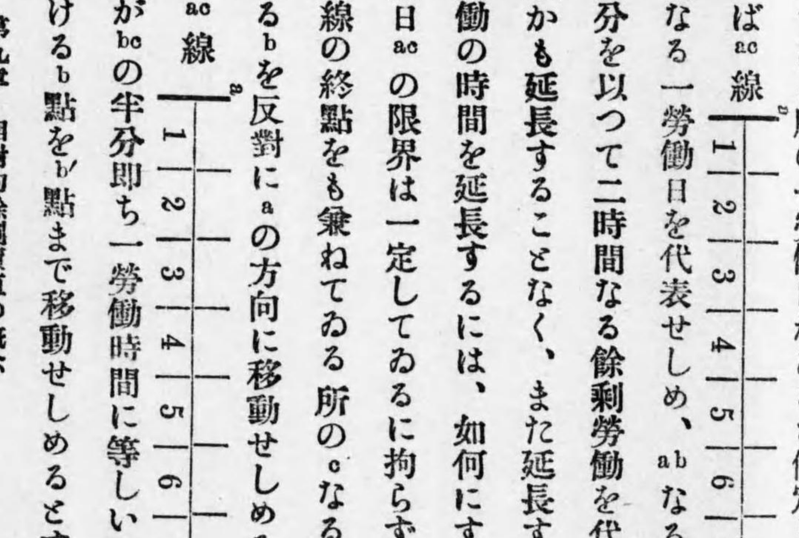
極めて伸縮自在な諸制限は暫く措き、商品交換それ自身の性質からは、勞働日の何等の限界も、隨つて餘剰勞働の何等の限界も、生じて來るものではないことは、以上の說明に依つて認められる所である。資本家が勞働日を出來得る限り延長し、可能でさへあれば一勞働日を二勞働日にもしようと努めてゐるのは、これ蓋し購買者としての彼れの權利の主張に外ならないのである。一方に又、勞働力なる販賣商品の特殊な性質の中には、購買者に依る消費の制限が含まれてゐるので、勞働者が勞働日を一定の標準時間に制限しようとすることは、これ畢竟、販賣者としての彼れ自身の權利の主張にほかならないのである。斯くして此賣買關係の上には、一つの二律背反が、共に等しく商品交換の法則に依つて封印されてゐる權利と權利との對抗が、行はれることになるのである。平等の權利と權利との抗爭を決定するものは强力である。されればこそ標準勞働日の確立は、資本制生產の歷史上、勞働日の制限に關する鬪爭として、總資本家たる資本家階級と總勞働者たる勞働者階級との間の鬪爭として表現されてゐるのである。

第九章　相對的餘剰價値の概念

一、必要勞働日部分の可變性

以上の説明に於いては、資本に依つて支拂はれた勞働力の價値に等しい價値を生産するだけの勞働日部分をば不變の大さとして取扱つて來た。この勞働日部分は實際のところ、社會の現存せる經濟的發達段階に於いて、與へられたる生産條件の下に在つては、不變の大さを有してゐるのである。勞働者は彼れにとつて必要なる此勞働時間以上に、尙ほ二時間、三時間、四時間、六時間など勞働することが出來る。餘剰價値の率と勞働日の大小とは、此延長の大小に懸るものであつた。必要勞働時間は不變であつたが、反對に總勞働日は可變であつたのである。いま、それ自身の大さが與へられてゐて、且つ必要勞働と餘剰勞働とへの分割も一定してゐる所の一勞働日があると假定しよう。

例へばac線



を以つて、十二時間なる一勞働日を代表せしめ、abなる部分を以つて十時間なる必要勞働、bcなる部分を以つて二時間なる餘剰勞働を代表せしめよう。この場合、ac線それ自身を些かも延長することなく、また延長するとしても其事からは全く獨立して、餘剰勞働の時間を延長するには、如何にすればいいか。

勞働日acの限界は一定してゐるに拘らず、bc線は延長し得るやうに見える。それはac線の終點をも兼ねてゐる所のcなる終點を超えて延長し得ないとしても、起點たるbを反對にaの方向に移動せしめることに依つて延長し得るのである。

いまac線

に於けるb′bの大さがbcの半分即ち一勞働時間に等しいと假定しよう。假りに十二時間勞働日acに於けるb點をb′點まで移動せしめるとすれば、bcは延びてb′cとなり、勞働日は

依然十二時間であるのに、餘剰勞働は二分の一の增大を來たして、二時間であつたものが三時間となる。けれども餘剰勞働を斯くbcからb′cに延長することは、必要勞働を同時にabからab′に、即ち十時間から九時間に縮小せずして不可能なることは明かである。餘剰勞働の延長に應じて、必要勞働は短縮されることになる。換言すれば、勞働者が從前事實に於いて自分自身の爲に消費してゐた勞働時間の一部は、資本家のためにする勞働時間に轉化されることとなるのである。變化するものは勞働日の大小ではなくて、勞働日が必要勞働と餘剰勞働とに分割される比率である。

他方に又、勞働日の大小と勞働力の價値とが與へられてゐるとすれば、餘剰勞働それ自身の大小も與へられてゐることになるは明かである。勞働力の價値の再生産に必要なる勞働時間は、勞働の價値に依り、勞働力の生産に必要なる勞働時間に依つて決定される。勞働者の生活資料の價値が一定してゐるとすれば、彼れの勞働力の價値も一定してゐることになり、彼れの勞働力の價値が一定してゐるとすれば、彼れの必要勞働時間の大小も一定してゐることになる。然るに餘剰勞働の大小は、總勞働日の中から必要勞働時間を減ずることに依つて確められる。十二時間から十時間を減ずれば、殘る所は二時間である。而して茲に假定する條件の下に於いては、餘剰勞働が如何にして二時間以上に延長され得るかは、考へ得られないことである。尤も資本家が生活資料の價値以下の貨幣を勞働者に支拂ふ事は、確かに有り得ることである。だが、我々の研究に於いては、かかる場合は問題外に置いて考へる。我々は一切の商品、隨つて勞働力も亦、價値一杯に賣買されると假定するからである。かく假定するとき、勞働力の生産（即ち勞働力の價値の再生産）に必要なる勞働時間は、勞働者の受くる賃銀が、彼れの勞働力の價値以下に低落するといふ理由に依つては減少し得るものではなく、寧ろ勞働力の價値それ自身が低落する場合にのみ減少し得ることとなるのである。勞働日

の大小が一定してゐるとすれば、餘剰勞働の延長は必要勞働の短縮に起因すべきであつて、反對に、餘剰勞働の延長が必要勞働の短縮に起因すべきではない。上例について言へば、必要勞働時間が十分の一の減少を來たして、十時間から九時間に短縮され、かくして餘剰勞働が二時間から三時間に延長されるやうになるには、勞働力の價値が現實に於いて十分の一だけ低落することを要するのである。

二、勞働生産力の增進

然しまた、勞働力の價値を斯く十分の一低落せしめるには、從前十時間で生産されてゐた所のものと同一量の生活資料が、今や九時間で生産されるやうになることを要する。けれども之れは、勞働の生産力が增進せずしては不可能なことである。與へられたる勞働要具を以つて、靴屋は例へば十二時間なる一勞働日に一足の深靴を製造し得る。同一の時間に二足の深靴を造るやうになるには、彼れの勞働生産力が二倍に增進することを要する。而して彼れの勞働生産力は、彼れの勞働要具なり勞働方法なり、又は其雙方なりに變化が生ずることなくしては、二倍に增進し得るものではない。即ち彼れの勞働の生産條件、換言すれば彼れの生産方法、隨つて又勞働行程それ自身の上に、一つの革命が生ずることを要するのである。玆に勞働生産力の增進といふのは、總じて、一商品の生産上社會的に必要なる勞働時間を短縮せしめ、ヨリ少量の勞働を以つてヨリ多量の使用價値を生産する所の力を與へる勞働行程上の一變化を指すのである。曩に考察した形態の餘剰價値生産に於いては、生産方法は一定せるものと假定したのであるが、必要勞働の餘剰勞働化に依る餘剰價値生産を成立せしめるには、資本が歴史的に傳來せる形態、換言すれば豫め與へられたる形態の勞働行程を占取して、ただ其持續時間を延長するといふだけでは、決して充分でない。勞働の生産力を增進し、か

くすることに依つて勞働力の價値を低減し以つて此價値の再生產に必要なる勞働日部分を短縮するには、勞働行程の技術的竝びに社會的條件、隨つて又生產方法それ自身を革命することが必要になつて來るのである。

三、絕對的餘剩價値と相對的餘剩價値

勞働日の延長に依つて生產される餘剩價値を、我々は絕對的餘剩價値と名づけ反對に、必要勞働時間の短縮と、それに應して生ずる兩勞働日部分間の量的比率の變化とに依つて得られる餘剩價値を相對的餘剩價値と名づける。

勞働力の價値を低減せしめるには、勞働力の價値を決定する生產物、換言すれば通例生活資料と稱するものの範圍に屬する生產物か又はそれに代用せられ得る生產物を供給する所の產業諸部門に生產力の增進が生ずることを必要とする。然るに商品の價値なるものは、其商品に最終の形態を附與する勞働の量に依つてのみ決定されるものではなく、尙また其商品を造るに必要な生產機關に含まれてゐる勞働の量に依つても決定されるのである、例へば一足の深靴の價値は、靴屋の勞働のみに依つて決定されるものではなく、また革や、蠟や、絲などの價値に依つても決定される。そこで生活必需品の生產に必要なる、不變資本の素材的要素たるべき勞働要具や勞働材料を供給する所の諸產業に生產力の增進が生じて、其生產物の價を安くするときにも、勞働力の價値は同樣に低減することとなるのである。反對に、生活必需品も、また其生產に必要なる生產機關も供給することなき生產諸部門に生產力の增進が生じたところで、それがため勞働力の價値は影響を受くるものではない。

價の安くなつた商品は、それが勞働力の再生產に關與する程度に比例してのみ、勞働力の價値を低減するものであることは論を俟たない。例へば襯衣といふものは、生活必需品ではあるが數多き生活必需品中の一つに過ぎない。隨つて襯

衣の價が安くなるとすれば、襯衣に對する勞働者の支出が減少するに止まるのである。然るに生活必需品の總量は、特殊諸産業の生産物なる種々異つた商品から成るものであつて、此等各種の商品の價値は常に、勞働力の價値の可除的一部を構成してゐる。勞働力の價値なるものは、勞働力の再生産に必要なる勞働時間の短縮につれて減少し、而して此勞働時間の短縮の總量は、上述の凡ゆる特殊生産部門に於ける勞働時間短縮の總和に等しいのである。かかる一般的の結論は、茲では個々の各場合に於ける直接の結果であり目的であるかの如くに見る。或る資本家が勞働生産力の增進に依つて、例へば襯衣の價を安くするとき、彼れは必ずしも勞働力の價値、隨つて又必要勞働時間をば、それだけ低減することを目的としてゐる譯ではない。けれども彼れの爲すところが、終極に於いてこの結果に貢献する限り、彼れは一般的餘剰價値率の增進に貢献することとなるのである。資本の一般的竝びに必然的なる傾向は、之れを其現象形態から區別して考へることを要する。

四、資本主義的生産の矛盾

商品の價値は、勞働の生産力に反比例する。勞働力の價値も亦同樣である。勞働力の價値は、他の商品の價値に依つて決定されるからである。反對に、相對的餘剰價値は勞働の生産力に正比例する。それは生産力が增進すれば增大し、生産力が低減すれば減少するのである。貨幣價値に變化がないと假定すれば、十二時間なる社會的の平均勞働日は、常に同一の價値生産物、例へば三圓といふ價値を生産する。然るに勞働の生産力が增進して、一日分の生活資料の價値、隨つて又勞働力の日價値が、二圓五十錢から一圓五十錢に低落するとすれば、その結果、餘剰價値は五十錢から一圓五十錢に增大する。勞働力の價値を再生産するには、從前十勞働時間要したのであるが、今や六勞働時間を要するのみとなり、四勞働

時間といふものが遊離されて、餘剰勞働を追加され得るやうになる。されば商品の價を安くし、かくすることに依つて又、勞働者の價を安くするために、勞働生産力を增進させることは、資本の内在的衝動にして且つ不斷の傾向となるのである。

商品を生産する所の資本家から見れば、其商品が如何なる絶對的價値を有するかといふことは、それ自體としては何うでもいい問題である。彼れにとつて利害關係あることは、商品の中に含まれて居り、販賣に依つて實現される所の餘剰價値のみである。餘剰價値の實現は、必然にまた前貸價値の回收を伴ふ。所で相對的餘剰價値は勞働生産力の發達に正比例して增大するのであるが、商品の價値はそれに反比例して低減するのであるから、同一の行程が一方には商品の價を安くすると同時に、他方には其商品の中に含まれてゐる餘剰價値を增大することになる。交換價値の生産のみを眼中に置いてゐる資本家が、何故不斷に商品の交換價値を低減せしめようとするかといふ謎は、此事實に依つて解決される。

五、生産力の增進は勞働者の幸福を齎らさず

資本制生産のもとに於いては、勞働生産力の發達に依る勞働の節約は決して、勞働日の短縮を目的とするものではなく、一定の商品量の生産に必要なる勞働時間の短縮を目的とするに過ぎないものである。勞働生産力の增進せる結果、勞働者が例へば從前に比べて一時間に十倍量の商品を生産し、かくして各個の商品の生産に要する勞働時間が十分の一に減じたとしても、かかる事實は決して、彼れに從前通り十二時間勞働せしめ、從前の百二十個に對して一千二百個生産せしめることを妨ぐるものではない。寧ろ、彼れの勞働日は同時に延長されて十四時間となり、かくして一千四百個生産するやうになるかも知れない。さればこそ、マカロックや、ユーアや、シーニョアや、その他有象無象的經濟學者の著書を見る

と、彼等は一方に、生產力の增進は必要勞働時間を短縮するものであるから、勞働者はこれについて資本に感謝の義務を負ふと說いて居りながら、其次の頁では勞働者はこの感謝の意を表する爲に、從來十時間勞働してゐたものを將來は十五時間勞働しなければならないと說いてゐるのである。資本制生產の內部に於いて勞働生產力の增進が目的とする所は、勞働者自身の爲の勞働に支出しなければならぬ勞働日部分を短縮し、以つて資本家の爲に無料で勞働すべき殘餘の勞働日部分を延長し得るやうにすることである。商品の價値を安くすることなくして、如何なる程度まで此結果を達成し得るかは、相對的餘剩價値生產の特殊方法に依つて知られる所である。これより進んで其方法を攻究することにする。

要するに相對的餘剩價値なるものは、勞働者の生活資料の價値を低減することに依つて與へられるものであり、而して此生活資料の價値は、生活資料を生產する勞働の生產力の增進に依つて低減せしめられるものである。然らば勞働の生產力は、如何にして增進せしめられるか。それは前にも述べた如く、勞働方法の改善と勞働要具の發達とに依つて與へられる。而して近世に於ける勞働方法改善上の最も顯著なる事實としては協業及び分業の發達を擧げ得べく、また勞働要具發達の最も重要なる結果としては、機械の發明及び應用を擧げることが出來る。

以下、此等のものについて特質を概述しよう。

第十章　協　業

一、勞働者の數の問題

同一の個別的資本に依つて同時に使用される勞働者が多數に上り、隨つて勞働行程の範圍が擴大され、大量の生産物が産出される所に、資本制生産は初めて開始される。他の生産方法に於けるよりも多數の勞働者が、同時に、同じ場所で(或は同じ勞働範圍で、といつてもいい)同一種類の商品を生産する目的を以つて、同一なる資本家の命令の下に働くといふことは、歴史的にも、概念的にも、資本制生産の出發點を成すものである。生産方法それ自身に就いていへば、初期のマニュファクチューアの如きは、同一の資本に依つて、同時に多數の勞働者が使用されるといふ一事を除けば、殆んどツンフト的手工業と異ふる所なく、ただツンフト親方の作業場が擴大されただけのものに過ぎないのである。兩者の差異は、其初め量的たるに過ぎない。與へられたる一資本に依つて生産される餘剰價値の量は個々の勞働者が供給する餘剰價値と、同時に使用される勞働者の數との積に等しいことは、曩に説いた所である。此勞働者の數それ自身は、餘剰價値の率、換言すれば勞働搾取の程度に何等の變化をも生ぜしめるものではなく、商品價値の生産一般に就いて言へば、勞働行程上に於ける一切の質的變化は、どうでもいい問題であるやうに見える。

一千二百人の勞働者が個々別々に生産するのも、同じ一資本の命令の下に一括されて生産するのも、その間何等區別する所がないのである。

二、數から生ずる質的差異

だが、一定の限界内に於いて變化の生ずる點がある。價値に對象化される勞働

は、社會的平均性質の勞働であり、平均的勞働力の實現されたものである。然るに平均量なるものは、同一種類の種々異なつた多數個別量の平均としてのみ存在するものである。各產業部門に於ける個別的勞働者は、平均勞働者とは多かれ少なかれ異つた所がある。かかる個別的差異は、數學上には『誤差』と稱せられてゐるものであるが、これは多數の勞働者を一括して考へるとき、相殺されて消滅に歸する。有名なる詭辯學者エドマンド・バークが、小作農業者としての實地經驗から學んだと主張する所に依れば、五人の農僕といふ如き『極めて小なる一團に於いて』も既に、勞働上の凡ゆる個別的差異は消滅してしまふ。そこでイギリスに於ける一流の成年農僕五人が總括的に爲す所は他の手任せに撰び出した五人の農僕が同一の時間に爲す勞働量と異ならないといふのである。

三、社會的平均勞働

そは兎も角、同時に使用される數多き勞働者の總勞働日をば此等勞働者の數で割つたものが、それ自身に於いて社會的平均勞働の一日たることは明かである。各勞働者の勞働日が、例へば十二時間であると假定しよう。さうすると、同時に使用される十二人の勞働日は一百四十四時間なる總勞働日を構成する。而して十二人中の各の勞働は、多かれ少なかれ社會的の平均勞働とは一致しないものであつて、いづれも社會的の平均勞働者に比し、同じ作業のため幾許かヨリ大又はヨリ小なる時間を要するかも知れないが、然し各人の勞働日は一百四十四時間なる總勞働日の十二分の一に相當せるものとして社會的の平均性質を具備してゐるのである。が、十二人の勞働者を使用する資本家の立場から見れば、勞働日なるものは彼等十二人の總勞働日として存在してゐる。而して彼等十二人が互ひに協力して勞働するにしろ、又は同じ資本家の爲に勞働するといふ點にのみ彼等の勞働の全結合が與へられてゐるにしろ、かかる事實からは全く獨立して、彼等各人の

勞働日は、上述の如き總勞働日の可除部分として存在してゐるのである。

反對に若し、此等十二人の勞働者の中、二人づつ別々の小親方に依つて使用されてゐるとすれば、この場合、各親方が同一量の價値を生產するか否か、かくして又餘剩價値の一般率を實現するか否かといふことは、偶然の問題に屬し、諸種の個別的差異が生ずることになるであらう。商品の生產上、一勞働者の消費する時間が、社會的に必要なる程度を著しく超過し、彼れ一個にとつて必要なる勞働時間が社會的に必要なる勞働時間（即ち平均勞働時間）から著しく遠ざかるとすれば、かかる場合には、彼れの勞働は平均勞働たるものではなく、彼れの勞働力は平均勞働力として通用するものではない。彼れの勞働力は全然賣れなくなるか又は勞働力の平均價値以下でなくては賣れなくなるであらう。要するに、勞働能性について、一定の最低限が前提されてゐることになるのである。而も此最低限は、平均と一致するものではない。尤も一面に於いて、勞働力の平均價値が支拂はれねばならないことは事實である。斯樣な次第であるから、六人の小親方中、或者は餘剩價値の一般率以上、或者は又以下を打出すことになるであらう。かかる不等は社會にとつては互ひに相殺されるであらうが、個々の親方にとつてはさうではない。されば價値增殖一般の法則が個々の生產者にとつて完全に實現されるやうになるのは、彼れが資本家として生產し多數の勞働者を同時に充用するに至つた時、換言すれば最初より社會的の平均勞働を運轉するやうになつた時、初めて行はれることである。

四、勞働者の數が對象的條件に上に齎らす革命

數多き勞働者を同時に使用することは、勞働方法の上には變化を與へないと假定しても、勞働行程の對象的條件は之れがために革命を受けるのである。多數のものが勞働する所の建物や、原料その他の物の置物や、多數の者に依つて同時に

又は交代的に使用される容器、器具、什器など、約して言へば生産機關の一部は今や勞働行程に於いて共同的に消費される。一方に、商品隨つて生産機關の使用價値の利用が增進すればとて、その交換價値は決して增進するものではなく、他方に又、共同的に使用される生産機關の規模が增大して來る。二十人の織工に二十臺の織機を以つて勞働せしめる作業室は、獨立した一人の機織業者が二人の職人を使つて作業する部屋よりも廣大でなければならないことは事實であるが、然し二十人に勞働せしめる作業室の生産に必要な勞働は、二人に勞働させる作業室十個の生産に必要な勞働よりも小である。かくの如く、大量的に集中され、共同的に使用される生産機關の價値は、總じて其範圍及び利用效果の大なる割合には增大するものではない。共同的に利用される生産機關が、個々の生産物に移轉する價値部分は、ヨリ小となる。なぜならば、かかる生産機關に依つて移轉される總價値は、時を等しうしてヨリ大量の生産物に配分されるからである。

他方に又かかる生産機關は、個別的の生産機關に比べると絶對的にはヨリ大なる價値を以つて生産行程に入るが、作用範圍に比べていへば、寧ろヨリ小なる價値を以つて生産行程に入るのである。かくして生産商品に含まるる不變資本價値部分はヨリ小となり、隨つて又それだけ商品の總價値もヨリ小となる譯である。つまり、商品の生産機關がヨリ價安く生産される場合と同一の結果が生ずることになるのである。生産機關使用上の斯かる節約は、生産機關が數多き人々の勞働行程に於いて共同的に消費されることにのみ基くのであつて、生産機關なるものは、社會的勞働の條件、換言すれば勞働の社會的條件——個別的な獨立した勞働者又は小親方に依つて使用される所の、相對的に要費多き分散的生産機關から區別して斯く言ふ——たる資格に於いて此性質を與へられる。それは、數多き勞働者が同じ所で勞働するといふに止まり、相互に協力して勞働するのではない場合にも與へられるのである。而して勞働要具の中には、この社會的性質が勞働行程

それ自身に依つて得られる以前すでに、それを獲得してゐるものもある。

五、協業の定義と利益

生產機關の節約なるものは、總じて二重の見地から觀察すべきである。第一は、生產機關の節約に依つて商品の價が安くなり、隨つて又勞働力の價値が低減するといふ方面、第二は、此節約に依つて、餘剩價値と前貸總資本（換言すれば、不變分と可變分との價値總額）との比例が變更されるといふ方面である。

同一の生產行程、又は同一ではないにしても相互聯絡してゐる各生產行程に於いて、相竝び相協力して計劃的に勞働する數多き勞働者の勞働形態を稱して協業と名づける。

騎兵一個中隊の攻勢力、又は步兵一個聯隊の守勢力は、各一人々々の騎兵及步兵に依つて個別的に展開される攻勢力及び守勢力の總和とは本質的に異なるものであるが、それと同樣に、個別的なる各勞働者の發揮する機械的力の總和は數多き勞働者が同一の不分割的作業に於いて、同時に共同勞働する場合、例へば一つの重荷を揚げたり、萬力を回はしたり、又は障碍物を取り除いたりする場合に展開される社會的の力能とは異なるものである。

斯樣に結合された勞働の作用は、個別的の勞働に依つては全然與へられ得ないか、又は遙かに長期間を以つて、若しくは極小の規模に於いてのみ、齎らし得るに止まるであらう。要するに、協業に依つて個別的の生產力が增進されるといふ事のみではなく、又それ自身に於いて新たなる集合力たるべき一つの生產力が造り出されるといふ事が問題となるのである。

多數の力を合して全一力たらしめる結果、一つの新たなる力能が生じて來るといふ事實は暫く措き、大抵の生產的勞働に於いては、單なる社會的接觸のみに依つても既に、競爭心と血氣の特殊なる刺戟とが造り出される。而して之れが又、

各人の個別的勞働能力を增進することになるのであつて、同一の勞働日に各十二時間づつ共同作業する十二人の勞働者は、個別的に各十二時間づつ作業する十二人の勞働者、又は日々十二時間づつ十二日間連續して作業する一人の勞働者に比べて、遙かに大なる總生產物を供給する譯である。これ畢竟、人類は本來、アリストテレースの謂ふ如く政治的の動物ではないにしても、兎にかく社會的の動物であるといふ事實に基礎を置いてゐるのである。

多數の者が同時に協力して、同一又は同じ種類の勞働をする場合にも、各人の個別的勞働は總勞働の一部たる資格を以つて、勞働行程それ自身の種々異つた段階を代表し得るのである。

例へば十二人の建築石工が、建築用の石を足場の下から頂きへ送る目的で一列を成した場合、彼等は何づれも同一の勞働をするのであるが、彼等の各がする個別的作業は總作業の相連續せる各部分を成すものであつて、夫々の石が勞働行程上の通過しなければならない各段階を代表する譯である。而して之れがため、總勞働者の二十四本の手は、各勞働者が足場を上下すると假定した場合に於ける二本づつの手の十二倍よりも遙か迅速に、同一の目的を達成する。要するに、勞働對象は、ヨリ短時間に、同一の距離を通過することになるのである。他方に又、同一の建築が、同時に種々異つた方面から着手されるやうな場合を採つて見るに此場合にも、各協業者は同一若しくは同じ種類の勞働をするに拘らず、彼等の勞働は結合勞働となるのである。勞働對象を空間的に多方面から取扱ふ結合勞働者(總勞働者)は、前後に目と手を持ち、或程度まで遍在性を具えてゐるものであるから、一百四十四時間なる結合勞働日は、空間的に種々なる方面から勞働對象を捕捉することになるのであるが、之れがため總生產物は、各局部的の勞働をしなければならぬ多かれ少なかれ個別的な勞働者の十二時間勞働日の十二倍に比べて、ヨリ迅速に完成されることとなる。生產物の各異つた部分が、同時に成熟し

て來るからである。

以上の說明では、相互補充的の多數勞働者に依つて、同一又は同じ種類の勞働がなされるといふ事實を强調したのであるが、それは蓋し、共同勞働の斯かる最單純形態は、最も完成された協業形態に於いても一つの大なる役割を演ずるからである。勞働行程が複雜である場合には、單に協同勞働者の數が多いといふ一事に依つても、種々異なつた作業を異つた人々に分擔させて同時に進行せしめ、かくして總生產物の產出に必要なる勞働時間を短縮することが出來る。

生產部門に依つては、勞働行程それ自身の性質上決定された一定の危急期を有するものが少なくない。玆に危急期といふのは、是非とも一定の勞働結果を擧げなければならない一定の時期を指すのである。例へば一群の羊の毛を剪るとか、又は若干段步の畑から小麥を刈つて取り入れるといふやうな場合には、作業が一定の時期に始まつて、一定の時期に終はるといふ事情が生產物の量及び質を左右することになる。此場合には、鯨獵などの場合と同樣に、勞働行程に必要な期間が豫め確定されてゐる。個々人を以てしては、一日の中から、例へば十二時間といふ一勞働日以上を刻み出し得るものではないが、假りに一百人の勞働者が協業するといふやうな場合になると、十二時間なる一日は一千二百時間といふ一勞働日に擴大されて來る。勞働期間の小なることは、決定的の瞬間に於いて生產部面に投ぜられる勞働量の大なることに依つて補償される。この場合、作業が時期を得たものとなるか否かは、同時に多數の結合勞働日が充用されるか否かに懸り、又作業上に於ける利用效果の大小は、勞働者の數の大小に懸るものである。アメリカ合衆國の西部地方に於いて、年々多量の穀物が、またイギリスの政府に依つて舊來の自治體を破壞された東インド諸地方に於いて、年々多量の棉花が荒廢に歸せしめられるのは、斯樣な協業の缺如に基くのである。

一方に又、協業は勞働の規模が擴大されることを許すものである。そこで土地

の排水や、築堤や、灌漑や、運河、街路、鐵道の建設などの如き、一定の勞働行程に在つては、勞働對象の空間的聯絡といふ一點からして、既に協業が必要になつて來る。他方に又協業は、生産規模の擴大と同時に生産場面の相對的縮小を可能ならしめる。かく勞働の作用範圍が擴大されると同時に、勞働の場面が縮小される結果、多大の空費が節約されることになるのであるが、此勞働場面の縮小なる現象は、歸するところ、勞働者の密集と、種々なる勞働行程の凝縮と、生産機關の集中とに基くものである。

個別獨立勞働日の總和に比すれば、それと等量なる結合勞働日はヨリ多量の使用價値を生産する。隨つて結合勞働日に在つては、一定の利用效果を生産するに必要な勞働時間は減少することになるのである。結合勞働日に依つて勞働の機械的力能が增進された結果か、又は勞働の空間的作用範圍が擴大された結果か、それとも生産規模に比べて生産場面が縮小された結果か、又は危急的の瞬間に僅少の時間を以つて多大の勞働が作用せしめられた結果か、それとも各個人間の競爭心が刺戟を受けて、血氣の緊張を來たした結果か、又は數多き人々のなす同じ種類の作業に連續性及び多面性の特徵が附與せられた結果か、又は種々異つた作業が同時になされるやうになつた結果か、それとも共同使用に依つて生産機關の節約を來たした結果か、又は個人的勞働が社會的平均勞働たる特徵を受くるに至つた結果か――いづれにしても、與へられたる場合に、結合勞働日が上記の如き生産力の增進を得たとすれば、結合勞働日の特殊の生産力は必ず勞働の社會的生産力、換言すれば社會的勞働の生産力となるのである。かかる生産力は協業それ自身に基くものであつて、勞働者が他の勞働者と計劃的に協同作業するとき、彼等は其個人的制限を脱ぎ棄てて種屬能力を展開することになるのである。

六、協業の條件

勞働者といふものは總じて、共に居らずしては直接に共同作業し得るものではなく、一定の場所に彼等を集合せしめるといふ事が協業の條件となるのである。隨つて賃銀勞働者なるものは、同一の資本、同一の資本家に依つて同時に充用されることなく、換言すれば同時に其勞働力を購買されることなくしては、協業し得るものではない。そこで勞働力それ自身が生産行程の上に集合される前に、先づ斯く集合さるべき勞働力の總價値、又は勞働者に支拂ふべき一日分、一週間分等の賃銀總額が、資本家の懷ろに集合されてあらねばならないことになる。たとひ一日分の賃銀でも、これを一括して三百人の勞働者に支拂ふといふ場合には、一年間を通じて毎週、少數の勞働者に賃銀を支拂ふ場合に比べて、ヨリ多額の資本支出を要する。隨つて協業勞働者の數、換言すれば協業の規模の大小は、個々の資本家が勞働力の購買上に支出し得る資本の大小、語を換へていへば多數勞働者の生活資料が個々の資本家に依つて支配される程度の大小に、先づ懸ることとなる。

以上、可變資本に就いて言つたことは、また不變資本についても言ひ得る。例へば、三百人の勞働者を使用する一人の資本家が原料について支出する所は、各十人の勞働者を使用する三十人の資本家の夫々が支出する所の三十倍に相當する。共同に利用される勞働要具の價値範圍竝びに素材量は、使用勞働者の數と同一の比例を以つて增大するものでないことは事實であるが、それにしても著しく增大することになるのである。されば個々の資本家の手に多量の生産機が集積されるといふ事は、賃銀勞働者の協業を成立せしむべき物質的要件となるのであつて、協業の範圍、換言すれば生産規模の大小は、此集積の範圍の大小如何に懸るものである。

別個的資本が一定の最低量に達するといふ事は本來、同時に搾取される勞働者の數、隨つて又産出餘剰價値の量をして、雇主彼れ自身を筋肉勞働から解放し、

小親方であつた彼れを轉じて資本家たらしめ、斯くして形式上に資本關係を確立すべく充分のものたらしめるに必要な條件として現はれた。然るにそれは今や、分散し相互獨立した多數の個別的勞働行程を轉じて、一つの結合されたる社會的勞働行程たらしめるに必要な物質的條件として現はれるのである。

七、資本の生產指導

勞働に對する資本の命令といふことも、本來は、勞働者をして自分自身の爲ではなく、資本家の爲に、隨つて又資本家の下に勞働せしめるといふ事實の形式的結果として現はれたものに過ぎない。然るに、多數の賃銀勞働者間に協業が行はれるやうになると、資本の命令は進んで勞働行程それ自身の遂行に必要なる條件換言すれば現實的の一生產條件となるのである。かくして生產方面に於ける資本家の命令は、戰場に於ける將軍の命令と同樣に不可缺的のものとなつて來る。

直接に社會的なる、語を換へていへば共同的なる、如何なる大規模勞働に在つても、個別的の活動間に調和を與へて、生產總軀の運動（その獨立した各器官の運動からは區別した意味での）に基く一般的の諸機能を盡すため、多かれ少なかれ指揮を必要とするものである。個々のヴァイオリン演奏者はみづから自己の樂長となるが、オーケストラに在つては獨立した樂長が必要となつて來る。かかる指導、監督及び調節上の機能は、資本の下に立つ勞働が協業的となるや否や、資本に屬する所の機能となる。而して此指導の機能は又、資本に屬する特殊の機能として、特殊の特徵を與へられることになるのである。

先づ、資本制生產行程の起動動機となり、決定目的となるものは、資本の自己增殖を出來得る限り大ならしめること、換言すれば出來得る限り多大の餘剰價値を生產すること、更らに語を換へていへば、資本家に依る勞働力の搾取を出來得る限り大ならしめることである。同時に使用される勞働者の數が增大するにつれ

て、彼等の反抗も亦ます〳〵著しくなり、隨つて此反抗に打ち克たうとする資本の壓迫も必然的に增大して來る。資本家の指導なるものは單に、社會的勞働行程の性質に起因して此行程に屬する所の特殊な一機能たるに止まるのみではなく、又同時に社會的勞働行程の搾取機能をも意味するものであつて、搾取者と彼れの搾取すべき材料との間に於ける不可避的對立を條件とするものである。

同樣に又、他人の所有物として賃銀勞働者に對立する生產機關の範圍が增大するにつれて、これを適當に使用すべき管理の必要が增大して來る。尙また、賃銀勞働者の協業なるものは、彼等を同時に充用する所の資本に基くものであつて、彼等の機能の間に聯絡を與へ、彼等を生產總軀として合一せしめるものは、彼等の外部に在り彼等を總合して分散せしめざる資本の內に存在してゐるのである。かくして彼等の勞働の聯絡は、觀念的には資本家の計劃として、實際上には資本家の權力として、自己の目的通りに勞働者の行爲を左右する外部的意志の力として、彼等自身に對立することとなる。

要するに、資本主義的指導は其內容の上から見れば、指導さるべき生產行程それ自身――一方には生產物を造る社會的勞働行程であると同時に、他方には資本の價値增殖行程である所の――の二重性に照應して二重のものであるとはいへ、其形態の上からいへば專制的のものである。而して此專制主義は、大規模なる協業の發展に伴ひ特殊の形態を展開して來る。資本家の資本が、嚴密の意味に於ける資本制生產を開始せしめるに必要な最低限の大さに達した時、彼れは先づ手工勞働から免脫されるのであるが、それと同樣に彼れは今や、個々の勞働者や勞働者群に對する直接不斷の監視といふ職能を特種の賃銀勞働者に委讓するのである。軍隊に將校と下士が必要である如く、同じ資本の命令の下に協同作業する勞働者群は產業上の將校(支配人)と下士(工長、組長)とを必要とするものであつて、此等の人々は勞働行程の進行中資本の名を以つて命令するのである。監視の勞働は

彼等の專屬的職分となつて來る。經濟學者は獨立自作農民又は自立的手工業者に依る生産方法を奴隷制度に基く植民經濟と比較するに當り、かかる監視の勞働をば生産上の空費に算入するのであるが、これに反して、資本制生産方法を考察する場合になると、共同的なる勞働行程それ自身の性質から來る指導機能をば、此行程の資本制的隨つて又對抗的なる性質に依つて必要とされる指導機能と同一視してしまふのである。資本家は産業上の指導者なるが故に、資本家たるのではなく、寧ろ資本家なるが故に産業上の命令者となるのであつて、對建時代に軍事上及裁判上の至高命令が土地所有の屬性であつた如く、今や産業上の至高命令は資本の屬性となるのである。

第十一章　分業及びマニュファクチューア

一、マニュファクチューアの二重起原

分業に基く協業は、マニュファクチューアに於いて其最も顯著なる形態を採る。資本制生産行程の特徵的形態として見た協業は、大體に於いて十六世紀の中葉から十八世紀最終の三分一期まで持續した嚴密なるマニュファクチューアの期間に專ら行はれたものである。

マニュファクチューアなるものは、二樣の經路を辿つて發生する。

(一)先づ、一つの生産物が最終の完成狀態に達するまでの間、一々加工されて行かねばならぬ互ひに種類を異にし獨立した手工業に屬する勞働者が、同一資本家の命令の下に立つ一作業場の內部に統合されるといふ場合。一例を擧ぐれば、

四輪馬車なるものは元來、車匠や、馬具匠や、裁縫師や、錠前工や、帶匠や、旋盤工や、緣飾製造工や、硝子細工匠や、畫工や、塗物師や、鍍金師などの如き各獨立した多數手工業者の勞働に依る總生產物であつた。然るに四輪馬車マニュファクチューアとに於いては、此等一切の相異つた手工業者は一作業場の內部に統合され、彼處で互ひに手から手へと同時に勞働する。勿論、製造前の四輪馬車に鍍金し得るものでないことは事實である。けれども數多くの四輪馬車が同時に製造されるとすれば、其一部がヨリ初期の生產行程段階を通過しつつある間に、他の一部を絕えず鍍金し得ることとなる。これだけの所では、また舊來のままの人と物とを材料する所の、單純なる協業の域を脫しないのである。が、やがて本質的の變化が生じて來る。專ら四輪馬車の製造にのみ從事する裁縫師や、錠前匠や革匠などは、其舊來の手工業をば全範圍に亘つて遂行する慣習を次第に失つてしまふのであるが、それと共に又、斯くする能力をも失ふやうになる。

他方に又、彼等おの〳〵の偏局化した行爲は今や、狹められた活動部面の目的に極めて合致した形態を與へられる。本來、四輪馬車のマニュファクチューアは諸種の獨立した手工業を結合せるものとして現はれたのであるが、後には次第に、四輪馬車の生產が樣々の特殊作業に分割される結果となる。而して此等の作業は夫々結晶して特殊勞働者の專屬機能となり、彼等の協業に依つて作業の總體が執り行はれるやうになる。同樣に布のマニュファクチューアや、其他諸種のマニュファクチューアも亦、種々異つた手工業を同じ資本の命令の下に結合することに依つて生じたものである。

(二)だかマニュファクチューアは又、以上述ぶる所とは反對の道程からも生じて來る。例へば紙、活字、又は針の製造の如き、同一若しくは同じ種類の勞働をする多數の手工業者が、同一の資本に依つて、同時に、同じ作業場の內部に使用される場合がそれであつて、これは最單純形態の協業である。此等の手工業者は夫々

（恐らく一人乃至二人の職人の助力を以つて）全商品を製造する。隨つて彼等はいづれも、全商品の生產に必要なる各種の異なつた作業を順次に遂行する譯であつて、舊來の手工業的方法を續けてゐるのである。然るに軈て外部的事情は、勞働者が同一の場所に集中されて、同時に勞働を行ふといふ事實をば、異つた形に利用せしめるやうになる。例へば、ヨリ多量の完成商品を一定期間に供給する必要が生じて來る。斯樣な場合には、勞働は分割され、從前には同一の手工勞働者が順次に種々異なつた作業をしてゐたのであるが、今や此等の作業は相互分離され個別化されて、空間的に併置されるやうになる。かくして此等の作業は、夫々異つた手工業者に割り當てられ、手工業者の總體が協業に依つて、同時に全作業を遂行することとなるのである。この作業分割は最初、偶然に生じたものであるが、それが繰返されてゐる間に獨特の長所を發揮し、かくして次第に組織的の分業に化骨して行く。種々異なつた作業をする獨立手工業者の個人的生產物であつた商品は今や夫々單一の部分作業しかしない一團の手工者に依る社會的生產物に轉化される。ドイツのツンフト的製紙工に於いては逐次的の作業として相融合してゐた諸種の作業も、オランダの紙マニュファクチューアに在つてはそれがおの〳〵分割され獨立して、多數の協業勞働者に依る相竝んだ部分作業となる。ニュールンベルヒのツンフト的針製造工は、イギリスに於ける針マニュファクチューアの基本要素となつたものである。ニュールンベルヒでは、一人の針製造工が恐らく二十種に及ぶ各作業を順次に遂行してゐたのであるが、イギリスの針マニュファクチューアに於いてやがて、二十人の針製造工が相竝んで勞働に從事し、而して其おの〳〵には、二十作業中の一つだけを擔任させるといふ狀態が生じて來た。而して此等の二十作業は、經驗に依つて更らに細分され、個別化して、個々の勞働者の專屬機能に獨立化して行つたのである。

二、マニュファクチューアの分業

かくの如く、マニュファクチューアの發生樣式、換言すればそれが手工業から生成される樣式は二重のものである。即ち一方には、相互獨立した各種手工業の結合が起點となるのであつて、此場合には、何づれの手工業も其獨立性を失ひ、特殊化されて、同一商品の生産行程に於ける相互補充的な部分作業たるに過ぎない狀態に達する。他方には又、同一種類に屬する樣々な手工業者の協業が起點となるのであつて、此場合には、同一の個別的手工業が種々なる特殊の作業に分割され、これらの作業が夫々分立し獨立化して、特殊の一勞働者の專屬機能たるに至たるのである。要するにマニュファクチューアなるものは、一方に於いては、一つの生産行程内に分業を導き入れ、又は既に採用された分業を更らに發展せしめ、他方に於ては、從前區分されてゐた諸種の手工業を結合するものであるが、然し其特殊の起點は何づれであるにしろ、最後に生ずる形態は異なる所がない。即ち何づれの場合にも、人間を器官とする所の生産機構となるのである。

マニュファクチューアに於ける分業を正しく理解する爲には、左の各項を固く捕捉することが必要である。第一に、生産行程が特殊の諸段階に分解されるといふことは、この場合、手工業上の一活動が各種の部分作業に分割されることと嚴密に一致する。複雜であると、單純であるとを問はず、作業は依然手工業的たることに變りはなく、個々の勞働者が器具を取扱ふに當つて發揮する所の力や、熟練や、迅速や、確實などに依つて左右されてゐる。その基礎を成すものは、依然として手工業である。斯くの如き狹隘なる技術的基礎のもとに於いては、生産行程の眞に科學的な分析を行ふことが不可能となる。蓋し生産物が通過する所の各部分行程は、手工業的の部分勞働として遂行され得るものでなければならないからである。斯くして手工業的熟練が依然生産行程の基礎を成して居ればこそ、各勞

働者は專ら一つの部分機能のみに從事する者となり、彼れの勞働力は終生、此部分機能を盡すべき器官に轉化される。第二に、かかる分業は協業の特殊なるものであつて、それに伴ふ幾多の長所は、協業の一般的性質に基くものであり、此場合に於ける特殊の協業形態に基くものではないのである。

三、部分勞働者及び其道具

更らに立ち入つて觀察するならば、先づ次の事實が明かに知られる。即ち終生同一の單純なる作業に從事する勞働者は、全身この作業の自動的に特殊化された器官と化し、隨つて一列の作業を交々執り行ふ所の手工業者に比すれば、作業のためにヨリ僅少の時間を消費することとなる。然るにマニュファクチューアの生きた機構を構成する所の結合總勞働者は、かかる特殊化した部分勞働者のみから成るものである。隨つてマニュファクチューアに於いては、獨立した手工業の場合に比し、一定の時間にヨリ多くの生産物が造られることとなる。換言すれば、勞働生産力が增進することとなるのである。尙また、部分勞働が一度び相互獨立化して個々人の專屬的機能となつたとき、その方法は完成されることになる。同一の局限された行爲を不斷に反覆し、それに注意を集中する經驗を積んでゐる中に、最小の努力を以つて所期の利用效果を得ることを覺えるやうになる。然るに種々代を異にした勞働者が、絕えず同時に共同生活をなし、同一のマニュファクチューアに於いて共同作業するのであるから、その結果、右の如くにして獲得された生産上の技巧は、軈て固定され、蓄積され、傳承されるやうになるのである。

四、分業の利益

一つの完成品を造るに必要な種々に異つた部分行程に相次いで從事する手工業

者は、時に應じて場所を變へ、器具を變へることが必要になつて來る。一つの作業から他の作業へと推移することのため、彼れの勞働の連續は中斷され、彼れの勞働日には謂はば間隙が生ずることとなる。此間隙は、彼れが終日間斷なく同一の作業をする時には縮小される。要するに、それは彼れの作業交代が減ずるに從つて縮小されてゆくのである。この場合、生産力が增進するとすれば、それは與へられたる期間に於ける勞働力の支出が增大した結果か、換言すれば勞働能率が增進した結果か、然らずんば勞働力の不生産的消費が減少した結果である。休止から運動へ移り換はる毎に、特別餘計の力を支出しなければならないのであるが、それは一度び達せられた平準速度が長期間に亙つて持續するとき相殺される。他方に又、一律なる勞働の不斷持續は、血氣の緊張力竝びに活動力を攪亂する。蓋し血氣なるものは、活動それ自身の變化の中に、氣晴しと刺戟とを見出すからである。

勞働生産力の大小は單に勞働者の熟達の大小に懸るのみではなく、又彼れの道具の完成程度にも懸るものである。ナイフや、錐其他の鑽孔器や、槌などの如き同じ種類の諸道具が、種々異つた勞働行程に使用される。また同一の勞働行程に於いても、同一の道具が種々異つた作業に役立つ。けれども同一の勞働行程に屬する各種の作業が相分離され、各部分作業が部分勞働者の手を通して出來得る限り適當な、隨つて專屬的な形態を採るやうになるや否や、從前種々なる目的に役立つてゐた道具の變化が必要となる。かかる形態變化の方向は、變化せざる形態に基く特殊の困難を經驗する所から定まつて來る。勞働器具に分化が生ずる結果、同一種類に屬する各道具は、夫々特殊の利用に適した特殊の固定的形態を與へられることになり、又勞働器具が特殊化される結果、かかる特殊の勞働器具は、夫々特殊の部分勞働者の手の中で、全範圍に亙つた作業をすることになるのであるが、此等の事實こそマニュファクチューアの特徵となつてゐるのである。バーミ

ンガム市だけでも、約五百種の槌を生産してゐる。而して此等の槌の各種は、特殊の一生産行程にのみ役立つものであるが、單にそれのみではなく、中には又、同一の生産行程に屬する異つた作業にのみ役立つものも少なからずある。マニュファクチューアの時代に、勞働器具は部分勞働專屬の特殊機能に適合せしめられることになるのであるが、これに依つて勞働器具は單純化され、改善され、また多樣化されて來る。同時に又、單純なる諸器具の結合に依つて生ずべき機械の物質的條件も、マニュファクチューア時代に造り出される所である。

五、マニュファクチューアの二つの基礎形態

マニュフクチューアの組織には、二つの基礎形態がある。而して此等の兩形態は、住々錯交するものであるが、それでも本質的に異つた二種類を構成し、且つ後に及んでマニュファクチューアが機械經營に依る大工業に轉化される時の如きには特に、全く相異つた役目を演ずることになるのである。かかる二重性質は、生産品それ自身の性質に基くものであつて、各種の獨立した部分生産物を單に機械的に結合することに依つて、完成品を造り上げるか、それとも相互聯絡した諸種の行程や手工の一列を通して、生産物の完成形態が與へられるかといふことがその基礎となるのである。

例へば一臺の機關車は、五千以上の相獨立した部分から成る。尤も機關車は大工業に依つて造り出されるものであるから、嚴密の意味に於けるマニュファクチューアの第一種を示すべき實例とはならない。だが時計は、其實例となること確かである。ウキリアム・ペテーも亦、時計を以つてマニュファクチューア的分業を例解してゐる。元來時計はニュールンベヒに於ける手工業者の個人的作物であつた。それが數知れぬ部分勞働者の社會的生産物に轉化されたのである。これらの部分勞働者を擧ぐれば、次の如くである。——發條製造工、文字板製造工、鬚發條製

造工、穴石製造工、爪石製造工、指針製造工、側(がわ)製造工、螺旋(ねぢ)製造工、鍍釭工等更らに副部類たる車製造工(これが又、眞鍮車と鋼鐵車との兩部類に分かたれる)、止メ製造工、機械製造工、カナ取附工(車を軸に附け、切子を磨いたりなどする者)樞軸(はぜ)製造工、取附工(諸種の車や軸を組み込む者)、一番車工(車に齒を彫み附け、適當な大さの孔を掘り、調整盤や、刺齒輪を硬化させたりする者)、ガンギ製造工、シリン機械用シリン製造工、ガンギ車製造工、天府輪(てんぷのわ)製造工、緩急針(時計を調整する制動機)製造工、眞ガンギ工等、次に香箱仕上ゲ工(發條箱及び調整盤を仕上げる者)、鋼鐵艶出シ工、車磨キ工、捻磨キ工、文字工、燒干支工(銅にエナメルを鎔かし込む者)、龍頭製作工(側の輪制(わさう)のみを造る者)、蝶番工(側の眞中に眞鍮棒を入れたりなどする者)、側バネ工(側の蓋あけバネを造る者)、彫物工、小鑿彫物工、側磨艶出シ工其他、及び最後に時計全部を組立て、そのまま使へるやうにして渡す仕上ゲ工。時計の構成部分中、異つた勞働者の手を通過するものは僅少に過ぎない。而して如上一切の離散部分は、最後にそれらを機械的の全一體に結合する人の手に入つたとき、初めて集合されることになるのである。

部分勞働者たちが同じ作業場の内部に結合されるか否かは、完成生產物が其各種の要素に對して有する如上の外部的關係に依つて、偶然の事實たらしめられるのであるが、これは他の類似の製造品に於けると異ならない。一度び部分勞働となつたものが、更らに相獨立した手工業としても經營され得ることは、スキスのヴァー及ニューシャテル兩州に見られる所である。然るに又ヂェネヴァ市の如きには、大規模の時計マニュファクチューア場があつて、此所では諸種の部分勞働者が直接一資本の命令の下に協業してゐる。だが此場合にも、文字板や、發條や、側などが、マニュファクチューア場の内部で製造されることは滅多にない。この場合、結合的のマニュファクチューア經營が有利となるのは、例外的なる事情の下にのみ可能である。蓋し自宅で勞働せんとする勞働者の間には、競爭が最も熾烈で

あり、且つあまたの異種的行程に生産が分割されるため、共同的勞働要具の利用は殆ど許されず、加ふるに勞働の分散に依つて、資本家は勞働建物その他に必要なる支出を節約することになるからである。だが自宅で勞働するとはいふものの事實に於いては一資本家（製造業者）の爲に勞働してゐる此等部分勞働者の位置も亦、自分自身の顧客の爲に勞働する獨立した手工業者の位置とは、全く趣きを異にしてゐるのである。

マニュファクチューアの完成形態たる第二種類に屬するものは、相聯絡した各種の發展段階を、種々なる段階行程の一列を通過する製作品を生産するもので、あつて、例へば縫針マニュファクチューアに於いて、針金が七十二種、甚だしきは九十二種にも及ぶ特殊部分勞働者の手を通過するが如きである。

斯種のマニュファクチューアは、本來分散してゐた各手工業を結合する限り、完成品を供給すべき特殊の各生産段階間に於ける空間的分離を縮少するものである。製品が一つの段階から他の段階に移轉される時間は縮少し、同樣に此移轉を媒介する手の勞働も減少することになる。されば手工業の場合に比し、マニュファクチューアに於いては、生産力の上に得る所がある。而して此利得は、マニュファクチューアの一般的なる協業的性質に基くものである。

他方に又、マニュファクチューア獨特の分業の原則からして、同數の手工的部分勞働として相獨立した各種生産段階の分立が必要になつて來る。分立した各機能間に聯絡を立てて、之れを維持する必要上製品を絶えず一方の人の手から他方の人の手中に、一方の行程から他方の行程に移轉しなければならなくなつて來る。此事實は、大工業の立場から見れば、特徴的にして要費多き、而してマニュファクチューアの原則に内在した一制限として際立つものである。

例へば製紙マニュファクチューアに於ける襤褸、又は製針マニュファクチューアに於ける針金の如き、一定量の原料について、觀察するとき、此等の原料が各種部

分勞働者の手を經て最終の形態に達するまで、順次に異つた生産段階を通過するものであることが認められる。反對に、作業場を一つの總機構として觀察すれば、原料は其凡ゆる生産諸段階に時を等うして存在する譯である。諸種の部分勞働者の結合に依つて成る總勞働者は、器具で固められた其數多き手の一部を以つて、針金を引くと同時に、他の手と道具とを以つて、それを伸ばし、更らに他の手と道具とを以つて、それを切つたり、尖らせたりする。種々なる段階行程は、時間的の縱列から空間的の横列に轉化される。かくして同一の時間に、ヨリ多量の完成商品が供給されることとなるのである。かかる同時性は、總行程の一般的なる協業形態に基くことは事實ではあるが、マニュファクチューアなるものは單に既成の協業條件を承けつぐのみではなく、又一部的には、手工業的活動の分解に依つて新たに之れを造り出すのである。他方に又、マニュファクチューアは、同一の勞働者を同一の部分勞働に膠著せしめることに依つてのみ、勞働行程のかかる社會的組織を達成するものである。

第十二章　機械及び機械工業

一、機械の特徴

ジョン・スチューアート・ミルは其著『經濟原論』の中で、『從來なされた一切の機械發明を以つてしても、何人かの日々の勞苦が輕減されたか何うかは疑はしい』と言つてゐる。だが人の勞苦を輕減するといふ事は、決して資本主義的に利用される機械の目的ではない。機械も亦、勞働生産力の他の凡ゆる發達と同樣に、商品の價を安くして、勞働者自身の爲に要する勞働日部分を短縮し、資本家の爲に無料で與へる勞働日部分を延長するといふ目的に役立つべきである。機械は餘剰價値生産の手段となるのである。

生産方法の革命なるものは、マニュファクチューアに於いては勞働力を起點とし、大工業に於いては勞働要具を起點とする。そこで先づ、勞働要具なるものは如何なる原因に依つて道具から機械に轉化されるか、或は又、機械は如何なる點に於いて、手工器具から區別されるかを攻究することが必要になつて來る。我々は茲に、大なる一般的の特徴のみを取扱ふことにする。蓋し社會史上の各時代も亦、地球史上のそれと同樣に、抽象的に嚴密なる限界線を以つて區劃されるものではないからである。

數學者や機械學者は、道具は單純なる機械にして、機械は複雜なる道具だと言つてゐる。彼等は斯く言ふとき、兩者の間に於ける何等の本質的區別をも見ず、加ふるに槓杆、鉋、螺旋などの如き單純なる機械力に機械といふ名稱を與へてゐる。如何なる機械も、此等の單純なる機械力から成つてゐることは事實である。然し經濟學上の立場からすれば、右の如き説明は何の役にも立たない。それは歴史的の要素を缺いでゐるからである。

他方に又、道具に於いては人間が動力であり、機械に於いては獸や、水や、風などの如き、人間力とは異つた自然力が動力であるといふ點に、兩者の區別が求められてゐる。此見地からすれば、牛に犁を曳かせることは種々なる生產時代に行はれた所であるが、かかる犁は機械であるに反し、一人の勞働者の手で運轉される所の、一分間に九萬六千個の織目を與へるクロソン式回轉織機の如きは、單なる道具に過ぎないといふことになる。否、同一の織機と雖も、之れを手で運轉する時には道具となり、蒸氣で運轉する時には機械となるであらう。ところで、獸類の力を利用することは、人類の發明の中最も古きものの一つであるから、機械生產は事實に於いて手工生產に先だつたものと言ひ得ることになるであらう。ジョン・ワキアルトは一七三五年に彼れの紡績機械を提供して、十八世紀の產業革命を開始せしめたのであるが、當時彼れは、人間の換りに驢馬が機械を運轉するといふ事は一言も語らなかつた。それでも此役目は、驢馬に歸したのである。彼れは是れに『指を使はずして紡績する』ための機械といふ說明を與へた。

二、機械の構成要素

總べての發達したる機械は、本質的に異なる所の三部分から成る。發動機と、配力機と、最後に道具機即ち作業機とがそれである。發動機は全機構の動力として作用するものであつて、此中には蒸氣機關や、熱氣機關や、電磁機などの如くそれ自身の動力を造り出すものもあり、又は水車に對する落流、風車に對する風其他の如く、既に與へられてゐる外部の自然力から刺戟を受けるものもある。配力機は節動輪や、動軸や、齒車や、滑車や、帶索や、綱や、調帶や、小齒車や、樣々な種類の聯動機などから成るものであつて、運動を調節し、必要の場合には運動の形態を例へば垂直狀から圓狀に轉化せしめ、且つ道具機の上に運動を配傳するものである。以上の兩機構部分は、道具機に運動を傳達して勞働對象を捕捉

せしめ、之れを目的通りに變更せしめる爲にのみ存在してゐるものである。十八世紀における產業革命の出發點となつたものは、實に此道具機といふ機械部分であつて、それは今日に於いても、手工業經營なり、マニュファクチューア經營なりが、機械經營に推轉する所に在つては、絕えず斯かる出發點となつてゐるのである。

所で道具機即ち嚴密の意義における作業機を更らに立ち入つて觀察するとき、我々は其處に、形態は著しく變化してゐる場合が屢々あるとはいへ、大體に於いて手工業者又はマニュファクチューア勞働者の使用した裝置や道具が再現してゐることを見出す。尤も從前人間の道具として使用されたものが、今や機構の道具として、換言すれば機械的の道具として使用されるといふ點は異なる所である。要するに全機械は、力織機に於ける如く、舊來の手工器具を多かれ少なかれ改訂して出版したものに過ぎないか、然らずんば紡績機に於ける紡錘、鞦編機に於ける編針、挽材機に於ける鋸、截斷機に於けるナイフ等の如く、古くから知られてゐる作業器官を作業機の骨格に取り附けたものである。此等の道具と、嚴密の意義に於ける作業機體との區別は、前者の出生に於いても見られる所である。即ち此等の道具は、今日でも尙大抵は手工業的或はマニュファクチューア的に生產されるものであつて、それが後ちに至り、機械的に生產された作業機體に取り附けられるのである。

要するに道具機なるものは、適當なる運動を傳へられた後その道具を以つて、從前の勞働者が類似の道具を以つてなした所と同一の作業をなす一機構であつて、動力が人間から來るか、又はそれ自身更らに一つの機械から來るかといふことは、問題の本質の上に何等の變化をも與ふるものでない。嚴密の意義に於ける道具が人間の手から機構に移轉されたとき、茲に單なる道具に代つて一つの機械が現はれて來るのである。此區別は、人間それ自身が尙ほ第一動力となつてゐる

場合にも直ちに看取される。勞働者が同時に使用し得る勞働器具の數は、彼れの自然的生產器具たる彼れ自身の身體器官の數に依つて制限される。ドイツでは最初、一人の紡績工に二臺の紡車を踏ましめようと試みた。即ち一人の紡績工をして、同時に二手二足で勞働せしめようとしたのであつたが、之れは過大の努力を要するものであつた。後に至り、二個の紡錘を具えた踏紡車を發明したのであるが、同時に二本の絲を紡ぎ得る如き熟達した紡績工は、殆んど兩頭人と同じく滅多に存在しないものであつた。然るに多軸紡績機は、最初より十二乃至十八個の紡錘を以つて紡ぐやうに仕組まれて居り、又襪編機は同時に幾千本の編針を以つて編むやうに仕組まれてゐる。同じ道具機を以つて同時に運轉せしめられる道具の數は、手工勞働者の道具を狹めてゐた身體器官上の制限から最初より解放されてゐるのである。

單なる動力としての人類と、嚴密の意義における手工勞働をなすべき勞働者としての人類との區別が、感性的に分明なる對照をしてゐることを示す手工道具は少なくない。一例を擧ぐれば、紡車を踏む足は動力として作用するに過ぎないが紡錘を操縱して絲を引いたり撚つたりする手は、嚴密の意義における紡績作業をなすものである。產業革命に依つて先づ襲はられるものは、此後ちの手工器具であつて、動力としての純機械的な役目は、目を以つて機械を監視し、手を以つて機械の錯誤を訂正すべき新たなる勞働と共に、之れを人間の手に一任して置くのである。他方に又、例へば磨臼の柄を回はしたり、ポンプを運轉したり、鞴の柄を上下したり、摺鉢で物を擦り碎いたりなどする場合に見られる如く、人間が最初から單純なる動力としてのみ働きかける道具に於いて、先づ動物や、水や、風などが動力として充用されるやうになることは事實である。斯種の道具は、一部的にはマニュファクチューア時代に、またマニュファクチューア時代以前に於いても既にポツ〳〵、機械に推轉しつつあつたのであるが、然し生產方法を革命する

には至らなかつた。此等の道具が其手工業的形態を以つてしても既に機械であつたことは、機械工業時代に知られる所である。

例へば一八三六年から三七年にかけて、オランダ人はハルレム湖を朝水するためポンプを利用したのであるが、此ポンプは通常のポンプの原理に從つて構造されたもので、ただ人間の手の代りに巨大なる蒸氣機關を以つて、ピストンを運轉するといふ點が、異なつてゐただけである。イギリスでは今日でも往々見られる所であるが、鍛冶工が通例使用する所の極めて不完全な鞴は、其柄を蒸氣機關と結合するといふだけで、既に機械的の空氣ポンプに轉化される。十七世紀の終末マニュファクチューアの時代に發明されて、十八世紀の八十年代の初葉まで存續した如き蒸氣機關は、何等の產業革命をも喚び起さなかつた。寧ろ反對に、道具機の發明こそ、蒸氣機關の革命を必要ならしめたのである。人間が道具を以つて勞働對象に作用しかけるのではなく、道具機の單なる動力として作用するに過ぎなくなつたときに、動力が斯く人間の筋肉の形を採つて現はれるといふことは寧ろ偶然であつて、風や、水や、蒸氣なども、人間の筋肉に代用せられ得るのである。勿論、かかる動力の變化は、本來人間を動力とすることにのみ適合して造られた機構の上に、屢々顯著なる技術上の變化が與へられることあるを除外するものではない。ミシン機械や、パン製造機械などの如き、進んで新生面を開かねばならぬ機械も、其用途の上から最初より小規模の使用を除外するものでない限り、今日では人間的動力と純機械的動力との雙方に適したやうに構造される。

產業革命の起點となる機械は、單一の道具を取り扱ふ勞働者に換ふるに、同一又は類似の多數道具を同時に操縱し、且つ單一の動力に依つて運轉される所の機構を以つてするものである。茲に初めて機械が成立するのであるが、然しそれは機械を以つてする生產の單純要素たる意味に過ぎない。

作業機の範圍を擴大し、作業機に於いて同時に運轉される道具の數を增大する